早稲田社会科学総合研究　第9巻第3号（2009年3月）

史料翻刻

奥宮慥斎日記――明治時代の部（一）――

島　善高

解題

奥宮慥斎（名は正由、通称周次郎。慥斎、慥々斎、晦堂と号す。文化八年七月二日～明治十年五月十日）は、幕末土佐藩校で教鞭を執り、侍読も兼ね、明治維新後は、高知藩喩俗司、神祇官権大史、高知藩大属、教部省大録、同権大講義などを歴任した人物であって、左のような数多くの著作を残した。

（一）周易私講十二冊、（二）書経私講（未完）三冊、（三）書経国字解（未完）三冊、（四）論語箚記一冊、（五）古本大学易簡抄一冊、（六）聖学問要一冊、（七）学術根本論一冊、（八）人間交際論三冊、（九）宗旨問答一冊、（十）八宗要略一冊、（十一）孫子私講（未完）一冊、（十二）荘子情解（未完）一冊、（十三）般若心経真解一冊、（十四）日本書紀私講七冊、（十五）神道大綱私淑抄一冊、（十六）日本古史略説一冊、（十七）神道弁一冊、（十八）神魂問答一冊、（十九）慥斎詩文集三冊、（二十）慥斎歌集一冊、（二十一）癸丑封事一冊、（二十二）今時論一冊、（二十三）地震建言一冊、（二十四）勝安房建白駁議一冊、（二十五）各種日記并紀行類拾冊、（二十六）救急時策一冊

これらの著作によって、慥斎の学が和漢に渉り、仏教や神道にも造詣が深かったことが知られるが、それのみならず慥斎は、その時々に政治的な建言も行なっていた。

また慥斎は、土佐でも、また東京でも私塾を開き、幾多の門弟を育てた。その中、主だった人物は次の通りである。

（一）南部従吾（漢学者、南部甕男実父）、（二）尾崎忠治（枢密顧問官）、（三）岩崎弥太郎（実業家）、（四）南部甕男（男

爵、枢密顧問官）、（五）岡内重俊（男爵、貴族院議員）、（六）仁尾惟茂（貴族院議員）、（七）小畑美稲（男爵、勤王家）、（八）淡中新作（学者、勤王家）、（九）丁野遠影（学者、元警視）、（十）島本仲道（勤王家、権大判事）、（十一）吉永清徳（判事）、（十二）都築門次（学者、論客）、（十三）北代正臣（元農商務省書記官）、（十四）中尾捨吉（判事、陽明学者）、（十五）中江篤介（号兆民、仏蘭西学者）、（十六）川尻宝岑（心学ノ大家）、（十七）坂本則美（実業家、禅学者）、（十八）島田正章（判事）、（十九）澤田衛守（学者、志士、於鎮西為国事死）、（二十）宮地厳夫（宮内省掌典、国学者）、（二十一）土井通豫（号香国、元逓信省局長、詩人）、（二十二）弘田正郎（教育家、学和漢洋ヲ兼ヌ）、（二十三）宮崎簡亮（実業家）、（二十四）仲彦太郎（検事）、（二十五）杉本清胤（電信学校教授）、（二十六）西森真太郎（漢学者、文章家）、（二十七）山本弘堂（詩人、俳人）、（二十八）川田小龍（画家）、（二十九）坂崎紫瀾（著述家）、（三十）田内逸雄（国学家、禅学家）、（三十一）中澤重業（判事）、（三十二）秋澤清吉（勤王家）、（三十三）依岡城雄（勤王家）

以上は「故奥宮正由履歴書類」（東京大学史料編纂所蔵）に記載してあるものであるが、これ以外にも自由民権運動で有名な植木枝盛も慥斎の塾に通っていた（拙稿「鉄舟と兆民と梧陰と」梧陰文庫研究会編『井上毅とその周辺』木鐸社所収）。

他方慥斎は

大塩平八郎、安積艮斎、藤森天山、大橋訥庵、羽倉簡堂、芳野金陵、田口文蔵、梁川星巌、藤森鉄石、春日潜庵、春日載陽、西郷隆盛、木戸孝允、勝海舟、鳥尾小弥太、伊達千広、小中村清矩、今北洪川、荻野獨園、島地黙雷、大洲鉄然、鴻雪爪、森田梅瀾、日根野鏡水、岡本寧浦、岡本一方、竹村東野、松岡時敏、岩崎馬之助、細川潤次郎、楠瀬大枝、徳永達助、門田宇平、小南五郎右衛門、平井政実、佐佐木高行、板垣退助、後藤象二郎、福岡孝弟、谷干城、斎藤利行、坂本龍馬、武市半平太、間崎哲馬、清岡道之助、牧野群馬

等々、各方面の著名人とも交わり（国立公文書館所蔵「奥宮正由事蹟目録」）、政治的には明治七年一月に結成された愛国公党の本誓の文章作成にも関与した（大久保利謙「愛国公党結成に関する史料―奥宮慥斎の日記から―」『日本歴史』四八八号）。

以上のような業績を残した人物であるので、大正時代、二度にわたって贈位申請の手続きが取られたが、結局それは実現しなかった。その理由の詳細は定かではないが、慥斎の三男健之が、明治四十三年大逆事件に連座、翌年一月、死刑に処されたことが最大の原因ではなかったと思われる。慥斎が所蔵していた夥しい数の史料は、昭和二十九年、高知市立市民図書館に寄贈され、現在では詳細な「奥宮文庫目録」も作成され、一般の利用に供されている。

さて筆者は、平成十一年八月、中江兆民関連史料を調査するため高知市民図書館に出掛け、そこで初めて奥宮慥斎文書に接し、慥斎が文政十三年から没する直前まで、丹念に日記をつけていることも

知った。そして慥斎日記を拾い読みするうちに、この日記を精査すれば、幕末土佐藩の動向のみならず、自由民権運動の源流、明治初年の宗教界の様子、そして教部省の実態などが少しでも解明されるのではないかと直感した（拙稿「自由民権と禅」『日本歴史』六三七号）。爾来、筆者は折に触れて市民図書館を訪れ、奥宮慥斎日記及び関連史料の写真撮影を行ない、それらを大学院の演習の教材として今日に至っている。

但し、土佐藩時代の日記を理解するためには幕末土佐藩全体についての知識、特に独特の地名や人名についての知識が不可欠であって、これを直ちに翻刻するにはかなりのエネルギーを要するので、差し当たり、明治時代以降の分を翻刻することとした。

先ず第一回目は、「戊辰日記第二集」（「奥宮文庫目録」受入番号一—七—四四）を翻刻した。これは、慶應四年四月一日から十一月十三日までの日記である。「第二集」とあるから、「第一集」もあったのであろうが、市民図書館には現在しない。この当時は戊辰戦争の真最中で、土佐からも会津・庄内攻略に出兵、奥宮慥斎の長男正治も参加した。この日記には、東北方面の戦況が逐次記され、また正治の安否を気遣う様子も窺える。

なお、この当時の慥斎の思想を窺う上で興味深い文章を参考として掲げた。参考一は「戊辰四月十日頃」（受入番号一—一—五二「勝安房建白牧野遠江守上書」所収）、参考二は「近時論」（受入番号一—二—八七）、参考三は、「勝安房建白駁議」（受入番号一—一—五二「勝安房建白牧野遠江守上書」所収）である。「勝安房建白」は慶應四年正月に書かれたもので、その全文も存在するが、「勝安房建白駁議」の中に文章がそのまま引用されているので、全文は省略した。また、この「勝安房建白」は従来の『勝海舟全集』（講談社版、勁草書房）に採録されていないので、勝海舟自身の文章であるかどうか、別途、考証しなければならない。

翻刻に当たっては、可能な限り原本の体裁を模倣したが、異体字、合字は通行の字体に改め、また判読不能箇所は□とした。

この奥宮慥斎日記を翻刻するに当たっては、高知市民図書館郷土資料室の足達康さんに、撮影その他で大変お世話になった。この場を借りて御礼申し上げる。

「戊辰日記」（明治元年四月～十一月）

（表紙）

「　入用　明治元年

夫為道者猶木在水、尋流而行、不觸両岸、不為人取、不為鬼神所遮、不為洄夫為道者猶木在水流所住、亦名腐敗、吾保此人決定入海四十二章経

たま〳〵に亀の浮木のなかれ来て　このまゝにのミ朽むものかハ

戊辰日記　第二集

西川善兵衛　彦根藩、或云北國人、國学家　通丁三丁、宮地寄宿、ハタ浪人廿計、大濱山崎某

あミたふと光る金をハ紙にして　上ハ金札下ハ混雑

戊辰日鈔　第二集　不離几案

（表紙裏）

「　以實字観義理、虚字審精神法

假如

學實字而時虚字習実之虚不虚亦実説虚乎

以直訳通文義法

学マナンテ而サテ時ソノバ習ソノコトヲナラハハ之コレモマタ不ウレシカラスヤ亦説乎」

夫我國讀法音訓間雑、轉倒為式、一騰口心便暁、不必俟講演、而文義大段既分明矣、措大讀書、多不識之、必依塾師俗講、以了文義、習以為定本、千吻同講師授有門、嗚呼如此暁大義、因何以得伸性霊哉」

晦堂日鈔　戊辰　壬四月

（明治元年四月）

朔日、晴、休暇、無事、巳後理髪、二女頓痣、或将発癇、延医診之、投剤去、田所惣右来訪、命飲、談話移晷、頗快、晩過高村氏、余早辞帰

二日、雨、早出館、無事

三日、雨、出館、衝泥帰、講家常言、マナンテトハ学問シテ也、ナラフトハ習孰ナリ、ヨロコハシトハ喜悦ナリト、是可謂笠上安笠、屋下畳屋、噫

四日、晴、出館、早帰、是日請山下左京奉封祖先已下神璽、命飲夜散、設神祠于正室東北隅

五日、晴、出館、講論語

六日、晴、出館、過潮江

七日、晴、是日有拜賀、錦旗之礼、豚児出、余腫疽発不出

八日、晴、使児告疾官、養瘡

九日、雨

十日、陰、児猪佐為四番胡蝶隊

十一日、雨、姪孝庵来、云健吉十五日允拜謁

十二日、新霽、無事、潮江价来、云十三四日亡妹十三回忌、是日豚児詣福岡大夫拜、健吉拜謁之命

十三日、陰、午晴、豚児抵府、季亦行、巳牌急脚一人帰自京、漾生有書、詳記壬生戦争、且録死傷等人員

「四月廿日、早発古河、因五小隊、我亦同出大砲二門、抵間々田、遇岩村田敗兵、聽宇津宮落城、我斥候隊日比弔作憩小山駅、頃之香川敬蔵卒宇津宮敗兵帰、云宇津宮城被焼、敵兵不在、壬生辺四面賊徒充満、甚危、乃使斥候隊趣壬生、申後達壬生、混雑中聞賊徒千餘人来、急整兵待賊、小島捨蔵、一番向日光口、日比弔作向宇津都宮口、因人二隊守壬生城徹暁、賊不来、聞官兵来前、賊放火市中迫城、云可去時官軍奄至棄之逃去、壬生城不抜、実因官軍早来也○廿一日、休、諸兵云賊陣安塚萩宮、未牌、因人砲隊二小隊進兵、本藩六番隊真辺介作進兵、晩示襲撃之状、又聞会斥候窺萩宮地利、夜五番隊宮崎合助出兵、夜半輜重衛平尾左金吾出兵、是夜亥刻聞砲声、報安塚始戦、是小戦也、○廿二日、暁寅前、一番日比弔作、二番小島捨蔵、大砲隊北村長兵衛出兵、此時祖父江可成、大石弥太郎亦出兵、秋沢清吉同輜重出兵、寅後因人又始戦、請代於我、即五番六番進兵、并砲隊及一二番亦馳至戦、雨甚、夜未明、不識別敵人与我兵、既自辰至巳後、賊砲尤烈、迨午後、遂大破賊、々兵潰走、時会因人後隊来、救因土合兵、追撃一里許、幕田賊棄巣而走、途火民屋、我兵及因人追逃、大捷帰、奪敵大小、砲百許、旗及器械、弾薬許多、未後惣軍還壬生城、是時我兵未入城前、賊残党妨途奪粮、且殺他藩斥候、発砲官兵、撃散之、又小賊窺城、放火於街口、時城中無勢、有狼狽出城者、又有小勢善防戦者、有頃我兵因兵帰自安塚、聞之賊不能入城而逃去、爾後是日無事○廿三日、薩兵并大垣兵、昨晩宿壬生城下者発宇津宮、辰後砲声甚烈、午前、薩兵被創者還城下、問状曰、初奪賊陸臺場、突入湟際、撃斃賊数百人、賊勢多臺難抜、頗苦戦、先是因人二小隊午前出兵、薩弾薬乏、本藩亦贈一二擔、尋本藩亦出一小隊、頃之五番隊輜重衛大石弥太郎亦進、但輜重衛約整頓安塚戦後帰、逢薩兵帰、問我及因兵状、云従間道引還故不識、午後帰、薩兵云、寡兵不堪勝算、且弾薬亦尽、故引還之際、来自結城薩長兵、将近代攻之、無幾大垣兵亦見破、山路為追撃云、申後本藩惣

兵皆帰報宇津宮落城、果従結城回兵攻之、薩大垣兵一旦引還、兵卒弾薬来聚攻之、因兵亦共攻之得捷、故雖得勝利、本藩援兵不及之、唯聞城陥而引還

或書生云、自甲府報書曰、方今若徳川慶喜、勝房州、可謂天下無双奸雄也、二人視天下人如嬰児、而今務示恭順意、将以収宇内人望、其意実不可測、一則潜伏待時、以窺　朝廷失策、将以覆宇内於一時、一則嘗遣親弟於仏國援後図、其畜異志、非一朝一夕、天下侯伯、多被他瞞昧、不堪痛憤、勝房州奪軍艦策、極可注心、且渠陽為　朝廷謀、乃陰所以為幕府謀也、其陰謀秘計、尋常非可測、可憎哉、是言切中肯啓、余聞之、益喜吾州有人也」

十四日、晴、晩微陰、無事、是日潮江遠忌、季児往拝

十四日（ママ）、雨、午前霽、閑無事

加美の美知といふことの真解

伊予人　三輪田總一郎著

言葉ハもと一音一義のものなり、言をつらねて語となせり、抑加美といふことハ加の一音に美をそへて加美とハ云へり、加ハ実物なれとも、かけより指ていへハ、加と云、上へよりハな加と云、或ハ遠くてかす加、はる加なといふ加にて、是将然の加なり、美ハ身実見のたくひにて、実躰已然の音なり、故将然の加に已然の身をそへて、神ハ現はるゝなり、美知は美の一音に知をそへて道とは云也、美ハ神の美にて既にいへり、知ハ筋町路なといひて、すちを引を知といへり、故神の霊能をひろく道引を神の道、またたゝに道ともいふ、こゝに神の道なりて天地いてきぬ、かゝれハ神の道ハ諸道の本つ道になんありける、天中愛甚（アナメテタ、アナトホト）天中尊

○　道の字を世の人音訓の空らめなく、なへて三千ともダウとも唱ふるハあらす、神道と書てハ必すカミノミチと唱へて、シムタウと音讀にハすましきこと也、儒道ハジュダウ、佛道ハブツダウと字音に訓て、儒の三千、佛の三千のミチとハよむましき也、神の道ハ言巻も可畏伊邪那岐、伊邪那美命二柱の御依しを、天照大神の受賜ひ、保たまひ、御々代々の天皇命にいや継々に傳賜ふ神の身血といふ意なれハ、シムタウと音讀にしてハ、いたく其意ニたかへり、ゆめあさくなおもひそ、深く妙なる神の道

信夫翁かしこみてしるす

十五日、晴、是日竹村謙吉登城、始拝謁　君公、余以疾告隊長、不能拝謁

十六日、晴

十七日、晴、是日児演角於仁井田、早起趨之、晩雨、児宿潮江、是夜英蒸氣船浦門入津云、秋澤精吉及樋口真吉横田某急来、江戸十五日発、江戸報日光捷音

十八日、雨、豚児帰、云拝謁告疾事有遺失、因可出謝書、乃往弘田氏、夜帰、書生来話、昨夜急報事、云日光賊軍、官軍襲之、因隊敗、我六小隊大捷之、遂奪日光山

十九日、陰、出館、講論語吾道不行章

廿日、雨、出館、留江口、訪原傳平、宿江口、豚児亦宿

廿一日、新霽、豚児訪佐川人、終日話、赤せ進吉之関東、即贈歌

時を得て弥生茂るワか草ニ　□すかゝる廿日雨のひ

廿二日、雨、漸雨、早出、無事、巳後帰

廿三日

廿四日、晴、無事、出館、小野馬助見訪、携一軸来示、山崎某所蔵大楠別子図、画麾下士住吉有慶、賛本居宣長図、拠古所傳与岡本辰四所蔵古図残火者同、恐古来真傳也歟

楠公桜井別子図賛

うまこりの、あやニくすしき楠の、大人の命の、天地に、いたれるいさを、一たひは、立けるものを、うつそみの、世の禍事と、二度ハ、立すて終に、港川、浮ふ水泡の、いたつらニ、なりにけるかも、いたつらに、なりてハあれと、大君に、事へまつろふ、もの、ふの、鑑となりて、天地の、よりあひのきはみ、あめつちに、いたれるいさを、望月の、照たらはして、たちニけるかも

本居宣長

廿五日、晴、無事、休暇

廿六日、微雨、是日恐入紙面出隊長、文別具

廿七日

廿八日、陰、是日公閲練兵於仁井田、男猪左亦従、予拉隣人児女輩、買舟往観、晩反松背江、投宿於潮江

廿九日、大雨、早出館、午帰布山

（明治元年五月）

例記一則

奥子如野有大蟹横行途上聞跫音也、欽螫瞑目貼然如死状、試杖之不動、而初不知全躰已露也、余熠見蹂躙馬蹄車輪也、促而投之江世、蓋有類此者、感以紀之

朔旦、新霽、直陰又雨、休暇、無事、晩急脚帰自京、未詳何事

二日、雨、衝雨出館、山本安生書来、書中付石川生時勢論一篇、頗

可観

三日、雨出館、是日高松侯使節、来月讃宿布師田、蓋大夫三宅某云、講論語令尹子文章、西姪有疑問、属羅券、書隊長

四日、雨、出館、巳後帰、讀勝安房上書、略辨之

端午、雨甚、無事、横川氏招飲、微醺、揮毫、以為慰

六日、雨、衝雨出館、巳後微腹痛、小憩西姪許、晩帰

七日、稍霽、早出、未後帰、禮弟来、為諸生講大学

八日、晴、北風、早出館

九日、晴、涛聲起、北風猶勁、農夫云、夜以忽損稼、幸昼則不甚損、宿潮江

十日、晴、出館、是日急報至自京師云、去月十八日ゟ廿日有上野大桑大戦争、二府参政帰自京云

十一日、雨、早出館、観昨戦争記事、訪都築生聽時事、禮弟亦来會、宿西姪

十二日、雨、出館、巳後帰、雨甚、洪水、門前堤決二所

十三日、雨、出館、巳後帰

讀太平記

雨露のかゝる御袖のありてこそ　天か雨をハ阿ふへきなり

郭公二首

雨くらく風荒き夜を郭公　一獨りうれしく鳴あかすらん

雨晴てたゑ〳〵のこる白ら雲を　おのか夏とや鳴く郭公

安井作平か許にて菊を乞たる折、肥後藩人岡松辰吾と共たり

吾か為に秋の錦をさかんとハ　恐やかけしおもふ友とち

十四日、大雨、衝雨出館、水行殆一里餘、巳後憩、江口姪来云、男猪佐馬被命大砲手、申後、衝雨帰、無事

十五日、雨歇、涛聲未収、早起、行潔除、拝諸神

十六日

十七日

十八日

十九日

廿日

廿一日

廿二日、雨、谷守部帰自関東、云本月念九発今市、五月六日発蒸気船於横濱、十二日達于浪華、拝謁　老公、乃取道中國、帰國

廿三日

廿四日

廿五日

廿六日

廿七日

廿八日

廿九日、雨、晩孝姪来、云隊長有命、即与姪往府、詣隊長五藤氏許、先所出恐入紙面、這回不被及、宿西森姪

卅日、雨、朝謝昨命辱於執事及大鑑察、是日初伏

次韵春日載陽老漢見寄

魔佛紛々莫相誇、龍路識龍焼識焼、咫尺穿天々且裂、果然城鼠本無才

（明治元年六月）

六月記

朔旦、霽、微雨数過、午後放霽、炎威甚、沢田岡村二生来、請講靖乱録、乃為授

二日、晴、早出館、云従明日奇日辰入未出、諸生亦大督責

三日、炎威甚、未後退食、適潮江、過都築生及克治、聽時事

四日、晴早出館、巳帰

五日、晴、早起、講論語、野本源太帰自関東

六日、晴、出館、夜林風憲帰自京、夜半林大監察急帰自京師

七日、出勤、訪潮江、晩帰

八日、炎威加昨、巳後退食、帰布山、晩騒雨一過、小雷

九日、晴、暑甚、退食後、過潮江、是日天満宮賽日、観燈士女雑沓、設偶人数十于社傍云、夜帰

十日、晴、早出館、付宗門帖隊長、午後帰

十一日、晴、早起、出館、途上発眩暈、午後退食、直辞帰、夜無事

十二日、晴、豚児蒙東征従軍命、姪孝庵来告、余以微痾告館

十三日、晴、豚児出館、余養痾在家、午時急使駕至、不詳為何事、脚子亦来到

十四日、晴、亡妻忌日、祭神棚、児輩拝墓、余未愈故不展

十五日、晴、無事

十六日

十七日、晴、余造館造愈

十八日、晴、出館

十九日、晴、出館、講論語

廿日、晴、出館、是日登城、奉賀太公進爵、余父子不出休業、夜訪淡中生、暫話帰、濱間暗黒且火滅、夜半帰宅

廿一日、晴、出館、児免関東征命、谷大監察帰京師、云北越賊、稍猖獗、因被命出兵、午後騒雨、帰途遇拝稲荷社

廿二日、朝冷于氣甚

廿三日、晴、講論語、今朝児被命北越行　奥宮猪佐馬

右者爾来之勤事を以、北越江被差立、依之三人扶持月金五両充被下置、日限之義者追而被仰付候

廿四日、晴、朝氣稍冷如秋、是日児蒙北越行命、詣執政府拝命

廿五日、晴、休暇、無事、諸生来為講義楠公桜井書

廿六日、晴、出館、輪講小学外篇、午後帰

廿七日、晴、出館、講義論語、蓋有不知而作之章

廿八日、晴、出館

廿九日、晴、出館

國士無双功臣第一、双美天所予、成就漢宮室、信亡何追漢王怒、
千秋奇観垂史筆、一鞭東指月在天、知己相求計不失、何奈他日不
相救、未央宮裏説蒯徹　蕭何月夜追韓信図

岩崎　馬

（明治元年七月）

朔日、晴、無事、休業、禮弟弘姪来、豚児明日出途

二日、晴、早起、余告病在家、是日亦小隊出兵、抵越北、日晡後、
先卒来布山、豚児發途、近隣来賀

三日、晴、早起、日出後豚児発布山、乗竹輿行、淡中生等来告別、
諸従軍為列通行門前

男正治か　皇軍にあともひて北越に物す馬の餞に
汝かつかふ（打放つ）火矢の手束（こみ矢の）も敷島の　やまとこゝろをゆめな忘れそ
おもふとちたかみニいさめいそしみて　皇軍の勲あらはせ
旅ころも裕にきなせ陸奥の　けふの細布胸あはすとも
袖狭き軍服やいあかならん　秋風寒し白川の関
まか寐して又風引な草枕　給ひもやらん人しなけれハ
けかさしと心ニしめて客衣　日にけにさらせ越の白布
汝か行む越の白山しらねとも　相思ふ夢ハ通ふとをしれ

四日、晴、閑無事、瀉二三行、稿招魂祭記、以國語文謙吉与長女、
之潮江晩招飲隣人一二、夜無事、雨

五日、秋冷、暗澹、出館、退食後過竹村氏、訪懸川街及潮江、遂省
母氏於江口、母氏比日患痢、尤軽症、夜宿、是日晩星馳来乾一郎手
書

六日、晴、出館、午微喀血、因退食、帰布山、夜児女輩集、徹夜祭
牽牛、雑沓不寐

七日、晴、休暇在家、無事、権吉元次及新左来

八日、早起、出館、雨、午後衝雨帰

九日、晴、告館養痾、胸微痛、無事、新左来

十日、晴、休告

十一日、晴、早起、出館、講論語泰伯章

十二日、晴、輪讀文章軌範、晩帰、二女往竹村氏

天貺

双美併賜人才多、國士功臣扶漢室、信亡不恕何追怒、信誅何相元

一筆、月下駆馬何急事、千秋知己不可失、誰料未央牝鶏啼、不説
蕭何説蒯徹　次韵

十三日、晴、晩吊竹村氏墓祭、處々焼香、門田生従今日休暇

十四日、晴、朝適大埇吊墓祭、午後帰、無事、吊隣家一二軒

十五日、雨、無事、収男猪左馬丸亀書信、云七日発船

十六日、晴、無事

十七日、晴、早出館、講論語

十八日、雨、出館

十九日、晴、出館、澤田生書、云九日達浪華、正治無事、其夜豚児
書信来、云滞在京師、十六日或発京

廿日、晴、炎威如火、出館、早退

廿一日、微陰、出館、講論語及荘子云々、橋本生等依所望、夜無事

廿二日、晴、早起、出館

廿三日、晴、午後陰、出館、論語講義、國澤氏講之

廿四日、晴、出館、已後退食、江口省母氏、為贈香魚十個及梨果数
枚、帰途買大根種子、秋晴如焚

廿五日、晴、休暇、無事

廿六日、晴、出館

廿七日、晴、出館、講論語

廿八日、晴、出館

廿九日、晴、出館、論荘子、午牌帰、訪江口、麻布侯卒、因従昨至
来月五日停五音

（明治元年八月）

八月分

朔日、大雨、洪水、殆及軒下砌、終日猛雨、夜半観水、々及砌際、
擁衾讀驢鞍橋、有省

二日、雨未歇、洪水漠張、白石生来、即付告疾

三日、雨猶不歇、涛聲高、養痾在蓐、夜無事、謙吉来

四日、雨、終日随几看書、且草般若心経私抄、夜西森姪書来、云池川叔父病利、殆不起、又伊藤羽左書来、云遂死、無嗣子不可奈何、是日謙吉帰、付以疾謝拝禮書

五日、新霽、無事

六日

七日、晴、出勤、告疾愈、風憲乾氏、訪小南氏、省母氏、又訪潮江吊池川氏遺家、晩過都築生、々今日以長崎行適浪華、是日丘天助公子発駕

八日、晴、出館、無事

九日、晴、早出館、講論語

貢士対策規則

一、貢士対策所　当分菊亭家

一、同対策定日、毎月五日、十五日、廿五日

右期日之外、差掛ニ建白有之候ハヽ、弁事傳達所へ差出可申事

策問條件

租税三章程　駅逓之章程　造貨幣　定権量　与外國結約　内外通商章程　拓疆　宣戦講和　水陸捕拿　招兵聚糧　定兵賦　築城砦或武庫於藩地　彼藩与此藩争訟

右、一條ヅヽ毎次対策之事

十日、晴、出館

十一日、晴、御法事ニ付休業、明日も同断

十二日

十三日、腫物大痛ニ付、告官休ム

十四日、正姫夫人薨、因従今日國中停歇諸事

十五日、陰、夜雨瀟々、無月、西森姪来訪話旧、終宿

十六日、稍霽、今日市中閉戸始開許商売、禁土木至念七日云

十七日、晴、無事、山本姪来訪、云昨夜山崎謙老帰自関東白川、因得曽我生哲四郎書、云七月十八日発白川、七月十三日攻岩城平、自朝寅至夜亥、遂陥城、賊徒会上杉等云、又十五日戦于仙臺道、薩大垣逐賊、吾藩今在白川

十九日、晴、無事、終日耕田圃、種蘿浮課児輩也、夜得豚児発江州中河内駅書、云七月十六日発京師、拝　天顔於紫宸殿南門、晩宿大津、七月廿二日之書也、蓋当時当滞近江歟、云経廿四日達越後高田城陸行云

廿日、晴、無事、午後出府、訪市川彬齋、被命飲、晩宿潮江、途訪都築生、病稍愈

廿一日、晴、朝辞潮江、訪克治、過掛川街午飯、辞去趣帰途、々中発疝痛、甚艱苦、投石渕三浦憲齋、乞診為処散剤六地、飲拂湯二碗、下之四鍼、稍差、乃辞去、扶杖漸歩帰家、呼枕寝、夜痛稍減

廿二日、陰、雖痛愈、腹猶攣急、擁衾看書排遣、是日下利二三行、蓋散剤効云、夜雨豪

廿三日、新霽、疝症全治、下利四五行、今朝官給、発付書豚児、托漾生、夜漾生等見訪

廿四日、晴、疾全癒、登後山遠眺、理旧稿名曰鶏肋集、以収難舎者念五日、晴、冷氣、禮弟来訪、云七月廿四日於新潟有大戦争、薩長及我築賀五藩大敗越賊、竟抜新潟、賊死傷殆一千人、薩亦喪一大隊、長次之五十人、我無所創、真可称愉快、長人山崎正治者、自戦場直報國云、今日森本醇助帰自横濱、創痍稍愈、被命酒微醺、挙家喜可知、借鎮臺日誌之四冊、晩禮弟帰

廿六日、晴

廿七日、晴

廿八日、晴、従今日出館、文武開業

廿九日、晴、出館

三十日、晴、出館、帰訪岡村生、留守、云北越有信、曰廿六日我隊入新潟、我及薩長戦争故、前日記事云薩長土者即是也、雖未可信、実可喜々々

（明治元年九月）

九月分

朔日、晴、無事、休暇、使大三修春米臺、山下安七郎見訪、命飲、談話移晷、昨得北越塘聞、云吾兵七月念六達新潟、及戦未詳、信為姑傳疑

二日、晴、出館

三日、晴、新寒、稍疝痛、然速愈、講論語

四日、晴、従今日至六日、以法会休暇、西姪来、返借書

五日、晴、無事

六日、晴、出館

七日、晴、出館、講論語及荘子

八日、晴、出館

九日、晴、禮弟孝姪等来訪、命飲、登後山

十日、晴、出館

十一日、晴、晩陰、早出府、従今日至明日、西邸近日之法会、因休暇、訪都築生等、晩訪市子父、夜帰、雨、夜、渡辺弥久馬急適京、不知何事、小監察等急自京師帰

十二日、寒、雨蕭々、無事、安井宇太郎見訪、云急適京師、不知何急事、蓋頃日京攝物騒、人情洶々之故乎、有三條落書之事、別具

十三日、晴、早出府、午後帰、夜無事、月食奇明

十四日、晴、早出館、過岡村武氏、云北代生過日従崎陽適北越探索云、岡村生ニ逢ト云

九月九日、浪花長堀邸ニ而北代忠吉直話

八月廿三日會津落城、國論不一定を以、自焼して仙臺へ落去之由、北越ニ而承之處、上京ニ而承り候所同断之報知有之由

一、越後ニ而岡村伊三郎へ面會、度々戦争、官軍勝利、本藩ノ勢も近日新発田へ繰込候由

一、兼日風説有之、回天丸初脱走之数艘、佐渡之孤島へ参着之説有之事

右忠吉者先達而崎陽へ被差立居候所、北越へ至り、過日上京、夫ゟ下坂ニ而、直話之儘記之事

浪華ゟ或人書翰

只今飛脚出足、一寸書添、今承り候處、幕船三艘、紀州ニ碇泊之趣、真偽ハ不相分、段々探索ニ相成候處、近日紀備因松山高松五藩反覆ニ而、不日挙旗之勢有之由ニ而、甚物騒御坐候、京師ゟ千人計下坂、北ノ口堂陣屋ニ相成居候趣、晩方見ニ参り、申含ニ御坐候、本藩下坂之兵隊ハ今朝已来、繰練賑々敷事ニ御坐候、先右承儘ニ御通達云々、九月二日巳刻過

外ニ四艘ハ行衛不知よし

十五日、晴、休暇、無事、隣曲招飲

十六日、晴、早出館、無事、写北代生羽越報書、過潮江訪小南、贈書一通

下横目惣代幸吉二人急来云

十七日、陰、早起、出館、午後退食、訪市川子文返傘、過田中生、云自京師有飛報、即迂路訪潮江弟、夜遂共過都築生、聽奥羽事、云去月従廿日至廿三日屠会城、飛報至京師、自京直達之、克治生来會詳聽話、雨、衝雨抵江口、宿姪家

十八日、新霽、早出館、昨話紛々、巳後帰布山、微痛足、昨日所聽別具

十九日、晴、以足痛告暇、無事、招隣曲、満醉之意、横生近日愉快也

廿日、晴陰不定、夜漾生招飲、微雨

廿一日、新霽、早出館、未後訪西森姪、云昨夜被命東行、乃命飲、廿三日発、陪主公、与為唯三人、一人矢野差左云、夜訪岡村氏、讀北代書、

廿二日、晴、早出館、巳後過姪家、示昨所得送別詩

喇叭歌送姪陪主公使奥羽、兼寄懐従軍諸君及児輩、戯用岑参送顔魯公韵、亦倣其体

君不聞鞨鼓鳥留聲巳悲、又雜喇叭任口吹、羽山越山雨雪早、弓勁馬肥驕胡児、豺狼助之群塞道、皇風一発如掃艸、又不聞魯陽揮戈返日斜、真郷奉使聞故筋、喇叭歌兮将送君、南海之月如北雲、望雲観月迷魂夢（長相思）、月数飛鳴待捷聞（立送）

付書児及日比淡中二子

廿三日、晴、講論語、西森姪急陪主公之奥羽、主従只三人云、星馳使也、夜宿江口、醉倒

廿四日、陰、出館、巳後帰

廿五日、晴、休暇、冒暁詣八幡神社、清月未落、寂寥可意、終日閑無事

廿六日、晴、出館

越後口官軍軍配

一、加州　柏崎　一、尾　小知谷　一、長　長岡　一、越前
一、越後高田　一、信州松代　一、同上田　一、薩州　一、信
田野口　一、信　高島　一、同　飯山　一、上州　高崎　一、同
三日市　一、越後　興板　一、大垣

追々出兵

一、越前　五百人　一、薩長土　宮様付七百人　岩國鍋島因五百

人　一、小倉大隊　一、宇和一大隊　一、津和埜　百五十　一、大洲　弐百人　一、越前大野　百人

廿七日、晴、早起、出館、講論語、晩陰、微雨、狂風騒起、或云孽龍

廿八日、雨、衝雨出館、無事、過西森、微飲、晩訪徳永及市川、且飲且話、遂宿

廿九日、新霽、従新町出館、未後過江口、帰布山、是日得軍務局報書一写、云従八月廿一日過廿七日、連日野戦于会城、官軍大捷云々

讀木戸福岡二子感時事詩、即賡其韵

（明治元年十月）

十月分

朔旦、休暇、終日無事、擁炉看書

二日、晴、理牆役小児輩、晩杉本生来訪、命飲、話数刻去、従今日至明日、大夫人氏有事於真妙寺、因賜告

三日、晴、無事、休暇

四日、晴、早出館、無事、急報自関東

五日、晴、出館、講郷党篇、昨日急報、有軍監前野氏報告、云北越行戦庄内口鼠関、豚児被創、或云臀、或云臂、傳写多誤、未詳、宿江口

六日、晴、出館、輪講小学、晩帰、児輩大憂苦、迎我問状、未詳、是日官脚発、又付一書

七日、晴、出館、講義、晩帰、昨途中裁書、付一詩

男児所志義兼仁、万死只應当一身、慰老温言且堪愧、玉疵却勝瓦全人

八日、晴、出館、無事

九日、晴、出館、講郷党、訪池内生於小高坂、聽奥羽戦状、云生亦従軍攻会城、拝同族祖神、夜帰、豚児書来、云創臂、幸不痛骨、可喜々々

十日、晴、出館、無事、過潮江示昨書、夜訪権吉於酒店、云為備中倉敷判事兼教兵官発程、共談時事、大醉

十一日、晴、寒風、暁起、訪権吉旅宿贈言、出館、講義、晩帰、寒甚、被酒臥

十二日、晴、寒甚、早起、出館、「七月十六日、浅川役、大石弥七郎七連砲ヲ以働ク、会賊大剛士ヒマヲ窺組テカヽル、賊大兵組シカル、賊短刀ヲ抜ントスルニナシ、トカクスル中、薩人カケ来、終ニ生捕、已来厳ニ拷問スレトモ、一言ヲ不吐死スト云」

十三日、寒威甚於昨、早出館、講郷党末篇、晩過掛川街、命飲醉臥、訪都生話数刻、夜訪潮江宿

十四日、冱寒甚、早起、出館、午後帰布山、無事、「保科家剣家森用蔵、白川役生禽、一圓麻府人兄弟、モト勤王、途ニテ支ラレ会ニ従ト云」

十五日、晴、休暇、終日写書、不出

十六日、微雨、出館、急報来自京師、云会賊降伏

十七日、晴、告疾、臥布山、無事

十八日、晴、暖甚

十九日、微雨

廿日、晴、無事

廿一日、晴、無事

廿二日、同、禮弟来、命飲、是日休暇、有事於大廟（山川海）、夜拉児女適竹村氏、宿

廿三日、晴、早起、出館、告愈、講論語閔子、侍側、今日明日表兄一周回忌、夜訪藤崎生、命飲竟宿

廿四日、晴、出館、無事、今朝飛報自関東、小笠原彦弥云、九月廿六日発、会津賊降伏、即報其状、無児信音、夜帰布山

廿五日、晴、休暇

廿六日、早出館

廿七日、出館

廿八日、晴、出館

卅日、晴、出館

（明治元年十一月）

十一月朔、休、在布山

二日
三日
四日
五日
六日
七日
八日、是日移居、冬至會、新田庄屋へ払筈、二十三匁五分五厘
九日、休業
十日、□帰布
十一日、在寓
十二日、雨、在寓
十一月十三日、雨、午霽、出館
十月分十四匁八分弐厘北川江済

参考一、「戊辰壬四月十日頃」

一書生甲州ヨリ報書曰、慶喜ト勝安房ノ両人ハ方今天下無双ノ奸雄也、両人天下ノ人ヲ視ル事嬰児ノ如ク、実ニ無人境ヲ行ク如キ風情アリ、慶喜今恭順ノ意ヲ示シテヌレ鼠ノ如クナレルハコレニテ、又一般人望ヲ収メ天下ノ哀憐ヲ増サシメ、益々薩長ノ讒誣スル事ヲ知ラシメン為ノ姦術ニテ、其裏情底意ハ実ニ不可測モノアリ、又安房ハ表ニ朝廷ノ為全尽力シテ十五大隊ト云旗下ノ籠リタル大城ヲ不血刃、言下ニ開城サセタルハ渠カ大功ナリト云ハセ、其実ハ私カニ謀ル処アリ、唯一人モ損セス東方ヘ援カシ後図ヲナサントスルモノニテ、竊カニ人心ヲ幕ニ帰セシメ、　朝廷ノ失策ヲ何カナト窺ヒ抜テ、天下ヲ一時ニ覆カヘサント謀ルモノ也、又薩カ勝ノ甘言ヲ受込テ、生ヌルキ手ヲヤルハ（慶喜ヲ水府ヘ謫スルハ実ニ乖ヲ受スルハ必野ニ放ツ也、ソレヲ取次テ甘奸アルヘシ）薩ノ東人ノ心ヲ攬ラン為メノ手段ニテ、是亦海老カテンノ天狗術也ト、コノ説切ニ皆膏肓ニ中ルト云ヘシ、果シテ十六七日ノ戦争ニテ其尾顕ハレタリ、十一大隊ノ旗下ガ徒居スル筈ナシ、説ニ板倉ヲ取立テ大将トシ、結城ヲ攻メント云、信ナリヤ不知、板モ固リ擁立セラレタテモアルマシ、高ハ会同類ニテ、正カノ時ハ天皇ヘ弓引奴ニテ、更ニ油断ナラヌ仁也、此節ノ人心固リトコニ朝敵アルヤラ油断ノナラヌ極イヤナ世界ナリ、今最中合戦スル組ハ真勤王ナレトモ、其餘ハ多クハ傍観依倚ニテ、順慶タラケ也、余嘗テ讀太平記、当時ノ人心、二三篇モ朝敵ニナリ官軍ニナリテ愧ヲ知ラヌハ、実ニ人面獣心ナリ、ケ程迂文盲ナル人心ハ、サスカニ戦國武士ノ果也ト大ニサケスミシカ、今ニシテ思ヘハ元弘建武ハマダ人心ノ古ニ近ク、二三ヘンニテ事足シ也、方今ハ五七ヘンモ心替スル人不少、ソレモ善ニ変スルハヨケレトモ、悪ニ変スルカ多ク、表ニ勤王ヲ唱ヘテ裏ニ勤幕ヲヤル

類アリテ油断ノナラヌ、一言半句モ物ノ言ヘヌ世界也、既ニ一有司ノ随分讀書モアル人物ガ今テハ屹度勤王ヲヤツテ居レトモ、長人ガアノ御方ハ已ニ五六ヘンモ御論カ替ル人シヤ、私カ逢テモ逢毎ニ論カ替ルト云シトソ、板已前ハ大勤幕デ当世ヘツケ合セ、勤王ノ大獄ヲ醸成シ、就中有志ヲ阿世立身ノ心ヨリ種々羅織誣罔シテ、遂ニ可惜有志ヲシテ断頭或ハ割腹ニ処セシムル抔、ソレニ付非常ノ出格ノ爵ヲ進メラレナトセシモノ、今亦拭顔テヤハリ権官ニ居ル抔ハ、実ニ与所ノミル目モ片腹痛ク、笑止千万ナル事也、其鐵面皮ト云ハ此輩也、イカニ廉恥心ナキトテ餘リ也、今度表忠招魂祭　勅命アリテ、従前死節國難ニ殉セシ人々ヲ吊フ由、招魂碑ノ立ト云ハ実ニヤ、之ニ付シテモ苟モ人心アラハ愧死スヘキ筈也、　朝廷ヘ異人参朝ヲ許セシハ大ニ訳アルヘキ事ト恐察セリ、其子細ハ、一ニハ討幕ノ師未タ成功ヲ見サルニ、異人ヤカマシキ事アレハ、事必済スヘカラサレハ也、二ニハ異人ハ通商サヘスレハ皆旦那ナリ、旧幕モ通商ノ権ヲ失ヘハサシテ取合ニ不及、新帝立テ新ニ定約ヲ結ヒ交易スレハ、新帝ヲ奉スヘシト云見込アリ、三ニハ、カノ刑部大輔侯カネテ仏ヘヤリ置シハ秘策ナルヘケレハ、其裏ヲカキテ、朝廷ハ今一段親近ナリト見スル為也、又一ニハ外國交際ハ平時也、戦争ハ臨時也、平時ノ事ヲ以テ臨時ノ事ヲ妨クルハ大ニ策ニ非スト思ヘル也、又ハ何モ訳ナク、万國交際ノ時節ニテ今更改メ難ケレハナリ、江戸ヘ登城スルモ同様トノ事ナルヘシ、方今所詮コレ位ノ事ヲ怪テハ事ハ出来ヌ也、マタ此上ニ異人ヲシテ御用ニ立タシメ、勤王モヤラスル程ノ手段ナクテハ、今世ハ御セラレヌ也、然レハ参朝ハ愚、位階ヲモ授ケ、有司ニ用ル事モアルヘシトノ見込ナルカ、併シ異人味噌ニテハ却テコノ手難被行カルヘシ、制人ト制於人ト違アルヘシ、此事等知者可道

慥々斎主人蔵

参考二、「近時論」（明治元年四月）

（表紙）「雑著類之四」

今時論　戊辰夏壬四月

司馬徳操曰。儒生俗使不レ知二事務一。知二事務一者在二俊傑一ト。実ニ千古ノ名言也。世ニ儒者文人ト称スル者。或ハ陳腐（コウイ）ナル経義ヲ講シ。高ク三代ヲ唱ヘ。又ハ歴史子集類ニ博通シ。其中文才アルハ策論人物論ナト書キテ。治乱興亡ノ跡ヲ論著シ。ヤカマシク閑議論ハスレドモ。今日眼前ノ時務ニ疎ク。実用ニ立タヌ者ナリ。又俗吏有司ハ平生事例格式ニ習ヒ。吏務世故ニ暗練シテ。何事ニモ抜差（ヌケサシ）ナキ様ナレドモ。何ゾ例ナキ大事出来テハ。俄カニ騒キ立。忽チ一身ノ利害毀誉ニ引カサレ。只々畏縮阻喪シテ平素暗練ノオモ出テズ。況（マシ）テ一旦緩急アルニ臨テハ。徒ラニ束手無策。惆然（アキレル）タルノミ也。軍書等ニモ奉行頭人抔。軍ニ役ニ立シ事ヲ聞カズ。方今世変打続キ。癸丑庚寅已来ヨリ。遂ニ今時ノ形勢ニ立至レリ。最初ノ程ハ儒生文人ナト。海防策ノ時務策ノト。我キミ各奇ヲ争ヒ種々ノ作アリテ。既ニ書肆ニテ海防彙議ト号シ。数十部ヲ集メタルモノヲモ見タリシ

ガ。事勢次第ニ変遷シテ。今日実ニ戦トナリテハ。儒生文人ノ論著モ漸々消ヘ失セ。此節天下ニ一人モ著作アルヲ聞カズ。廣キ世界必其人アルベケレドモ。余素ヨリ寡聞固陋ニテ。当世ノ人ヲ知ラズ。此迄一渉セシモノ、中ニハ会沢氏ノ新論抔ヲ勝レタリト思ヘリ。然ルニ其論高上ニテ。今日ノ急ヲ救フニハ間ニ合難キ事多シ。且事機ト云モノハ年々歳々ニ不同。日月ニ殊宜モノナレバ。此等モ今ハ早所謂杜丹ニナリタリ。況ヤ今日目下ノ時情ヲヤ。昨日ノ事今日早役ニ立タズ。時々刻々ニ幾変化スルヲ知ラザル也。先年在江戸時。一生時勢策ヲ作リテ。一斎老師ニ正ヲ乞シニ。先師之ニ書シテ曰。機事無一定之説ト。余時ニ之ヲ見テ。恍然若レ有レ所レ省。実ニ機事ハ時々活溌ノ眼ナケレバ。処シ難キモノト思ヒキ。然レトモ其後モ度々時事ニ感触スル毎ニ。例ノ技癢ニ堪ヘズ。草セシモノ数篇ニ及ヘリ。或ハ上レルモアレドモ。多クハ草稿ノ侭筐底ニ秘シ。又腹稿ニテ已ミシモアリキ。突壮封事ハ已ニ上レリ。地震献言ハ稿具シテ不レ上。去歳已来今春モ種々妄念起リ禁シ難ク。筆ヲ執シモノナキニ非ズ。急救時策目次竊機等。今茲壬四月竊カニ又技癢ヲ忍フ能ハズ。遂草ヲ起スニ至ル。事頗ル急迫ニシテ。文字ヲ撰ニ暇アラズ。俗語俚諺ノ侭ニ筆ニ任セテ。條記ス。固リ掛漏少カラズ。多クハ口授腹稿ニ譲レリ。眼前ノ事ニ付言タキ事ヲ多少漏セリ。其人ニ逢テ語ルヘキ為メナリ。

○一、書云。若薬弗瞑眩。厥疾不愈ト。今日ノ時勢実ニ然リ。薩長抔士気ノ振興セシハ。勿論平素訓練ニモヨルベケレド。其実ハ長ハ君侯ノ厳譴ニ原キ。京師暴発。馬関攘夷。就レ中國内同士戦ニ中シ。四境敵ヲ受ルニ成リ。薩ハ生麦ニ原キ。鹿児城一戦ニ起リ。今日伏水東征ニ成レリ。二藩ト雖トモコノ國難ナキ時ハ。今日如斯振興ハ出来ヌ也。サレバ今國中ヲ一新セントスル者。一度薬ノ瞑眩ナケレバ。所詮士気振作ハデキヌト知ヘシ。其手ヲ下ス初ハ。此度ノ大獄ヲ決断スルヲ以テ手始トナスベシ。而シテコレニ党シテ陰ニ助ヲ為セシ輩ヲ。一ニ厳ニ沙汰スベシ。就中近頃迄賊ト密ニ交通セシ者。今猶官府中ニ残リアルヘシ。コレヲモ痛ク懲治セシメ。且其中君側ニ咫尺シ。暗ニ君聴ヲ蠱惑セシ老奸抔ハ。遠斥セザルベカラズ。コレ等巨魁六七輩モ厳罰セバ。跡ハ所謂脅従ニテ。訳モナク換頭改面スベシ。是併シナカラ極大事ニテ所謂機事不密害成。カノ疾雷不及掩耳手段ヲ施カザレバ不能也。即今コノ事ヲ行フニ其任ニ勝ヘタル人物甚少シ。サレバトテ此挙万々不レ可レ已。余ガ寡聞不レ知レ人モ。一両人ハ其人ト思フモノアリ。是亦非常出格ノ抜擢ニテナケレバ不能也。東征ノ中ニハ其人乏シカラザレドモ。コレヲ待テハ時ニ晩レ機会ニハヅレテ。実ニ千載ノ遺憾ト云ベシ。如此事因循日ヲ引テ決定セザレバ。徒ニ機会ヲ失フノミナラズ。渠等必種々苦心シテ。手ヲ廻シ。大害ヲ引出スモノ也。遠クハ漢唐ノ宦官近クハ水府ノ殷鑑アリ。実ニ可惧々々。

○一、王政復古ニ付。　朝議カホド迄日々ニ運ヒユク曰新ノ機ヲ。諸藩ニ善ク体認シテ其國々ヲ一新刮目サセザルハ。其病因何処ニアルヤ。其畢竟東征ノ師博々シカラザルニ由ルナリ。彼旧幕ニ附和セシ意見。猶残リテヨモヤ〳〵ト思フ念アレバ。今如此日新ノ機盛ンナルヲ眼前ニ見カナラ。猶目ノ覚メヌ藩多シ。是ヲ一度糺正セザレバ。万事土崩瓦解ノ基トナルベシ。此策固ヨリ廣ク衆ニ咨ヒ謀ルベシ。必良策アルベシ。余モ亦竊カニ陳腐ナル拙策アリ。凡策略ト云

モノ。如何程拙策ニテモ。工合ヨク図ニ中ラバ存外ニ効アルモノニテ。奇策ニテモ図ヲハズレテハ役ニ立タスモノ也。只其人ヲ得ルト図ニ中ルノ二ツ也。

○一、関東ノ埒明カヌハ会賊ノ巣窟抜ケザルニ在リ。是ハ力攻ニ抜ントシテハ。大ニ人ヲ損シ費ヘアルベシ。古手ナレトモ今懸」金テ刺客ヲ募ラハ必ス効アルベシ。是亦余程思ヒ切重賞ヲ以テスベシ。彼北條ガ大塔宮ヲ謀リシ故智ヲ用ヒ。若シ会賊ヲ殺スモノアラバ。即曰ニ某郡何万石宛行ヒ。凡下ナラハ金何万両ヲ賜フト。処々ニ辻札ヲ立ベシ。勿論賊徒ヲ殺ス者等。ソレ〳〵相應賞格ヲ定メ一札トシ。且智辨ノ士ヲ遣ハシ。奥羽辺境土民迄説諭セシメ。王政復古ノ難有事ト。賊徒平カザレバ何ツ迄モ天下ノ若シハ已マザル利害ヲ熟復開示シ。其中右ノ高札ヲ津々浦々不洩様立置クベシ。利欲ニ迷フ人心。必ス不日ニ巨賊ノ首ヲ見ルベキ也。

○一、東征師ノ中最モ働キテ功ヲ立シ輩ハ。早々　朝廷ヘ召カヘサレ　御直ニ御褒賞アルベシ。勿論軍中ニ就テ賞ヲ行フモ。一軍ノ励ミトナルベケレトモ。戦労ヲ休メサレバ如何ニ豪傑也トモツヽカザル也。是王政ノ御発軔ニ攬人心第一策ナリ。時机ニ晩レテハ賞モ益ニナラヌ者ナリ。先日錦袍ヲ賜フト云訛言。或ハ其風諫ナルカ。下ヨリ催促シダシテハ安カラヌ事也。若又之ニセキテ負(マケ)オシミニナリ。吝賞ノ非アレバ大事ハ去ルト知ルベシ。

○一、頃来ノ久霖梅雨ノ常トハ云ナガラ実ニ不正気候也。コノ上照アガリタラバ必病人多カルベシ。東征人可憐也。片時モ交番新手ヲ入代ラシムベシ。且軍中頗ル法ヲ寛大ニシテ成丈鋭気ヲ養ハシムベシ。カノ軍法抔ト古風窮屈ナル苛法ヲ行テハ行カヌ事也。今時ハ又格別ノ軍法アルベシ。(コノ事另ニ具ス)

○一、洋夷ノ言トテ聞シニ。此度ノ戦争勝負ハ。疲弊シテ財ニ尽キタル方必ス負クヘシト。是例ノ利害上ノミ見テ名分大義ヲ知ラヌ洋夷ノ常言ナレドモ。亦心スベキ言也。一小吏ノ陳中ヨリノ書簡ニ。自レ古兵粮ニ尽テ軍士死亡セシ事ハ聞ケドモ。金ニ尽テ軍ヲヤメル。又ソレデ死亡スルト云ハ聞カヌ事也。然ルニ今日ハ其兆ナキ非ズ。不可奈何。片時モ早ク金ヲ差越スベシ。浪華腹喰ノ豪富ナトハ打毀チテモ妨ケザルニ似タリト。又一有司書中ニ万金ヲ贈リタルヲ喜ヒテ。欣喜雀躍此事也ト。サモ嬉シゲニ書シハ。実ニ其情可想可哀也。如此長陣ニ疲弊シテハ國力必ス尽クベシ。若モコノ上飢饉疫癘ナトアラバ如何カスベキヤ。兵ノ拙速ヲ貴フハ此ナリ。片時モ巣窟ヲ抜キ巨魁ヲ斃ス策ヲ施シタキモノ也。

○一、在京ノ諸有司等。遊蕩ノ盛ナル事法ニ過タリト云ヘリ。関東ニテハ身命ヲ抛テ戦争シ。入代ル新手モナク。此溽暑ニ向ヒ深入敵地。千難万死中ニ苦ミ。京摂ニテハ酒色ニ耽リ徒ラニ一身ノ宴安ヲ謀ルト云テハ。実ニ不都合ナル事也。戦士ノコレ等ヲ怨望セザル感スルニ餘リアリ。是モ惣督ノ其人ヲ得テ善ク攬「士心」ト見ヘタリ。雖レ然カク如キ事ツヽケハ後々ハ或ハ怨望ヲ生セザル得ザルベシ。苟モ其兆アラバ在都ノ有司尤可覚悟事也。若シ東帰ノ後ハ如何ナル事アルヤ否可怖事也。

○一、先ツ攘「内夷」而後可」及「外夷」トハ古人ノ名言也。凡外ヲ正サントスレバ先ツ内ヲ正スベシ。先ツ國中ノ賊ヲ糾正シテ基本ヲ立

テ。ソレヨリシテ可レ及二外賊一。苟モ内奸不レ除バ飯上ノ蝿ヲ逐フガ如シ。此事天下國家トモ皆同シ。然ルニ是レ時ナリ。時ハ不レ可レ不レ知。故ニ時アツテハ外ヨリ内ニ及ホス事モアルベシ。國是ノ一定セザル抔ハ。他國ヨリ自國ニ及ホシテ一定スル事モアリ。所謂時処位ノ至善ニテ一概ニ論シ難シ。時処位ニ叶ハザレバ何事モ行ハシ難シ是熊沢先生ノ常言ナリ

○一、今度　朝廷ニテモ楮幣ヲ以テ諸侯伯ノ疲弊ヲ救フ策出タリト。是必ス万々不レ得レ已権宜之策ナルベケレドモ。甚残念ナリ。何トナレバ。外夷谿壑ノ慾口ヲ張リテ己ヲ待ツアレバナリ。或人戯云。日本ハ本カミ（モト）ノ御國ナレバ。金銀ハイラヌ也。今度ノ復古ニテ又モトノカミノ國トナルベシト。実ニ恐入タル事ナリ。是（コノ）戯言徒ラニ聴過スベカラズ。コノ策余ハ竊カニ疑フ。外夷ノ黠者或ハコレヲ有司ノ近ゴスキ者ニ吹込シナランカ。不レ然ハ洋学家ノ目前近利ヲ見テ。遠大ノ患ヲ知ラヌ徒ノ献策ニ出シナルベシ。併シナカラ既往ハ咎ムルニ由ナシ。然ラハ何卒轉禍為福手段アリ度モノ也。迄（ママ）モ楮幣鈔銭ニテヤレバ。外國交易モコレニテヤルベシ。此策極メテ手段アリ。先年シイホルトガ貨幣論ニ云シ如ク。従来洋銀ノ相場誤テ高過キタリ。コレヲ引戻ス策ヲ言立テ其事承ケザレバ。今度ノ楮幣ノ事ニ及ブベシ。此ニハ極巧者アルベシ。商家ノ最モ利甚ナルモノ、胴ノ強キ假令ハ高田屋嘉兵ト云様ノ仁ヲ使フベシ。所謂使二馬圉一（キヨウ）ノ智也。万一ソレモ承引セザレバ。断然交易ヲ拒絶シ必死ノ決策アルベシ。返ス〳〵モ日本國中ヲ紙ニテ融通シ。正味ノ金銀ヲ外夷ヘ取ラレテハ。如何ニモ愚ナル事ナラズヤ。余コレヲ聞テ愁テ不寐。

○一、今時俗吏ノミナラズ。歴々ノ豪傑ガ。金策ガ一番六ケシキト云ヨシ。此一言ニテ勤王書生ノ口ヲ杜（フサ）ガントスルモノ多シ。是尤モ可歎也。真ニ第一義立ツ時ハ。金銀ハ何テモナキモノ也。一番難事ト云ハ人心ヲ収攬スル策也。苟モ人心ヲ収攬スル寸ハ。金策ハ必ス争献スル者アルベシ。併シ所是（所詮）三才小児所言。百歳老翁所難行ナリ。コレ与知者可道。

○一、経済ニ付テハ亦種々仕法アルベシ。但大体立タザレバ卑瑣ノ功利ニ落テ大害ヲ招クベシ。例ノ迂策另ニ先年草セシ者モアレバ今贅セズ。然レドモ救急苟且法ナカルベカラズ。急救時策ニ具ス

○一、人ヲ用ユルハ何世ニテモ急務ナレドモ殊ニ今時ホト急ナルハナシ。今日　皇運ノカク迍運ヒタルハ。幽助アルカ如クナレト雖トモ。実ニ勤王書生ノ周旋尽力ニ非サレバ不能ナリ。久留米藩ノ諭書ニ。今時ノ勤王ハ下モ処士ニ起テ。士大夫ニ及ヒ。公卿諸侯ニ及ヘリト。実ニ然リ。三百年太平ノ積弊上下ヲ入替ル草命ノ機今日ニ顕レタリ。人才ハ消長スルモノニテ。上ニアラザレバ必ス下ニアリ。方今天下ノ人才果シテ上ニ在ルカ下ニアルカ。是（コレ）不レ待レ智者シテ可レ知ナリ。然ラハ大ニ有レ為トスル君ハ。余程思ヒ切破格用レ人。三百年ノ弊習ヲ一新スヘキナリ。然ルニ此ニ大事アリ正邪ヲ選フベキ事第一也。破格用レ人ニ付コレヲ阻閡（ハヽム）スル説。動モスレハ云。人気立物議沸騰スト。若夫奸邪ヲ挙ケテ沸騰セバ実ニ大事也。正人ヲ用ヒテ人気立チ沸騰スル事アラバソレコソ願フ処ナレ。余ハ只竊カニ些（チ）ト沸騰スル程ノ事アラザルヲ恐ル、也。コノ事猶另ニ云

○一、長ノ高杉東行嘗曰。今日英仏等ノ盛強ヲ学ハント欲セバ。其未タ盛強ナラザル已前ノ百戦千難ノ中ヨリ起リシヲ学フベシ。今日

ノ弊勢ヲ以テ彼レノ已ニ治リタル富強ヲ坐ナカラ学ハント云ハ。大間違ノ極ナリ。故ニ曰ク宜ク奇変英達実行ヲ以テ天下ヲ一新スヘシト。誠ニ実践ヲ経シ確論也。如何ニモ強盛一新ヲ欲セバ。必須一旦千難万死ノ裏ヨリ来ラザレバ所詮出来ヌ事ト知ルヘシ。今日吾人皆力ヲモ労セスシテ。濡手ニテ粟ヲ掬ム様ノ妙策アラン事ヲ望ムハ可笑ノ極ナリ。一旦不測ノ難ヲ引受ケ。奈何トモスベカラザル危急ノ事アラバ富強策モ。人物モ。何程モ自カラ出ツベシ。

○一、隘陋俗人動モスレハ云。如此時勢ニテハ此末如何ガナリ行クモノナリヤト。其サキ、ヲ問詰テ不レ已是サシテ時勢ヲ憂ヒ世道ヲ懐フニテモナク。只臆病未練ノ心ヨリ生セリ。夫今日如此時勢ニ立到リシ事。一朝一夕ノ故ニアラズ。固リ有志憂國ノ士紛骨碎身セシ功効ト雖ドモ。亦天意天数ナリ。此十二三年前ニ立カヘリ想像シ見ヨ。如是　皇運ノ日々ニ運ヒユキ。王政復古トナリシハ。実ニ不思議ノ事ニアラスヤ。実ニ神州ノ神州タル所以。偶然ナラザル者アルガ如シ。此機ニ乗シテ有志ノ士種々協心戮力スルモ。云ハ、亦幽助アルガ若シ。故ニ此末トテモ必ス其道アルベシ。無益ノ取越苦労ニハ及ハヌ事也。諺ニ案スルヨリ産ガ安ヒト云ヘリ。閑議論徒懸念ハ真ニ無益ナリ。誠心実意ニテヤル事ハ。存外ニ易簡ニ無造作ナルモノ也。

○一、今日皇國ノ形勢盛衰如何ト云ヘハ。固リ隆盛ニ向フ山口ナリ。決シテ衰弱ニ趨ク季世ト云ニアラズ。之ヲ衰世ト観ルハ眼孔ノ小也。先年英ノ「アルコック」トヤラ高杉東行ニ謂テ曰。日本振古強國ト聞シガ。今形勢ヲ見レハ最弱國也。東行曰コレ眼前ノ形ヲ見テ将来ノ勢ヲ察サセル論ナリ。日本今昇平ノ弊ニテ。人才下ニ廻レリ。コノ在下ノ人才。近年大ニ憤興シテ世道ヲ一新セント。諸國云合セズシテ奮起セリ。看ヨ〳〵今二三年ノ内本ノ強國ニ復スベシ。徒ラニ眼前ノ形勢ヲノミ見テ将来ヲ察セサルハ無識ト云ヘシト。コノ論ヲ聞キ大ニ歓服セリト云ヘリ。果シテ今日其機顕ハレタリ。此ニ着眼ナキハ与ニ論スルニ足ラス。是亦不可与拘迂者言モノ也。

○近日聞シ事アリ。魯夷奥蝦夷地方ヲ開拓撫育シ。頗ル力ヲ尽スト。又朝鮮ノ後ロニアタル達旦地方ヲモ頻ニ開拓シ。而シテ其米夷ト接壤セシ地ハ。一切米ニ賣払ヒ。日本地方ノ後ロヲ廻ハリ引包マントスル勢アリ。油断スヘカラスト。地図ヲソヘテ仏國ヨリ忠告スト云ヘリ。是例ノ虚喝話ナルベケレドモ亦徒ニ聴過スベキニ非ズ。彼魯ハ君子國ニテ少モ疑フヘカラスト云ハ実ニ愚ナル論也。魯表ニ仁義ヲ飾ルト雖モ苟モ可取ノ寡隙アラバ。曷ンソ用捨会尺スベケンヤ。雖然コレ亦カノ勝房州ガ恐喝術ニ云処ト同一手段ニテ。必シモ実事ニハアラザルベシ。併シ万一実事実説ナラバ。コレコソ又一段ノ機会ニテ。轉禍為福ノ手アルベキ也。（勝生建白駁議ニ具ス）

○一、奥ノ今市駅ヨリ帰リシ一書生ニ逢テ話ヲ聞クニ。白川戦争ハ伏水後ノ猛戦也。賊ノ死傷夥シキ事。実ニ話ニナラヌ程也。屍バカリ数ヘテモ六百餘アリト云。手負其外将帥ハ必屍ヲ収メシナルベシ。其数亦幾多ナルヤ不可知。薩ノ即死僅カニ九人。手負ハ四十人斗ト云。此戦ニ會賊アマタ討死シ。其中有名人多シトソ。巨魁ハ秋月登之助ト云会ノ書生アガリニテ。一旦亡命セシモノナリ。若シ秋

月悌次郎ニテハナキカ。（悌次郎ナレバ先年一面識也。嘗聖堂ノ舎長ト為レルモノ。）当時ハサホトニモ思ハズ例ノ軽侮セシガ。此節中々ヤカマシキ由。所謂士相別三日将ニ刮（テ）目ヲ可（レ）待ナリ。長ノ桂生ナトモ。先年邂逅セシ時トハ大違ト云。事上磨練ハ実ニ人才ノ長スルモノ也。此ニ付テモ今諸邸ノ　公子方ヲ奉始。大夫士庶ニ至ル迄。随分選選シテ。十人モ二十人モオヒハナシ。諸國ヘ修行ニ遣ハサレ度モノ也。薩ナトハ西洋ヘ年ニ八十位遊学ニヤルトソ。併シ其中役ニ立モノ二三十ホカナキト云ヘリ。然（サ）モアルベシ。始メヨリ皆無益ニスマジキト思ヒテハイカヌモノナリ。吾藩渡洋抔ハ中々存カケナシ。責テハ他藩三都アタリヘヤリ度モノ也。近年　御特旨ニテ。太夫ヲ被遣事アリシハ。実ニ難有　御英断也。勿論修行者ハ公子太夫ニテモ。丸ノ諸生ニナリ艱苦ヲ嘗メザレバ役ニ立タヌ也。彼コニテモヤハリ高貴風習抜ケステハイカヌ訳ナリ。宿若太夫近日遊学セリト云。宿ニハ人物モ多ク。且若太夫頼モシキヨシ。余宿人ニ逢テ話スル毎ニ。他邦人ト話スル風情アリ。第一胸　ニ鱗甲（イカミ）ナク。城府（カマヘ）ヲ置カザルガ妙也。自力ニテ関東マテ探索カタく戦争手傳（ツタ）ヒニ往シ抔。感ニ餘アリ。本政府ニ於テ些恥カシキ事ナラスヤ。

○一、関東ニテ今日賊ノ為メニ周旋尽力シテ。陰ニ　皇軍ノ妨害ヲ為ス奸物ノ巨魁ハ。大久保一翁ト勝房州。又ハ小笠原図書等ノ二三人ニ若クハナカルヘシ。先ツ勝安房最初三道侯伯ヘ呈スト云一書ニ。専ラ旧幕為メニ遊説シ。且外夷ヲ援拠（コダテ）シテ彼ガ耳目ヲナセシ奸謀ナト。智者ヲ俟タスシテ明白ナリ。（此事予余リノ憤懣ニ堪ヘス、一々之カ辨駁ヲ作レリ、詳ニ其駁議ニ載ス。）大久保ハ勝生ヨリモ一層モ二層モ勝リタル老奸ト云ヘリ。実ニ渠等一二人ノ奸謀ニテ。角迠（カク）運ヒタル　皇軍ノ勝運ヲ妨害セラレ。万々一大事阻閣ニ至リテハ安カラヌ事也。片時モ早ク其所ヲ謀リ。反間ノ手ヲ行ヒ度モノナリ。此反間最モ手段多カルベシ。若シ渠等ノ中（ウチ）順ニ帰シ忠ヲ尽ス心底アラハ。随分用ヒテ我カ用ヲナサシムルモ一術ナレトモ。渠等ハ所謂不用則殺之。不可為敵所用モノ也。併シ容易ニ謀リテハ。却テ大害ヲ引出シ。渠ガ奸謀ニ乗ルヘシ。コノ用間策ハ極メテ大事ニテ。存二其人一勿論豫メ言ヒ難キ也。

○一、人ノ言ヲ聞クニ。官軍ハ餘リ策略ヲ用ヒズ。関東ハ極メテ策略多キニ似タリト。最初海道大惣督宮ヘ。日光宮ヲ以テ説得シ。次ニ和宮上野宮彰月尼公等ノ女使周旋。必ス彼輩ノ方寸ヨリ出シナルベシ。流石ノ西吉モ。此譎謀ニハヤラレシ抔評アリ。実ニ切歯ニ堪ヘザル事也。西吉等最初東下ノ時。コレ等ノ策略ハ心得アルベキ筈也。所謂将在（リテ）軍君命モ所（レ）不（レ）受ノ確言如何様託辞巧説ストモ。受付クベキニ非ス。女使ノ謀。尤モ陳腐。東照公大坂ヲ陥シ故智。児童モ知ル事ナリ。此処ニヌカルベキ人物ニモアルマシキニ。如何ナル事ソヤ。必万々不得已訳アルヘシ。既往ハ咎メテモ詮ナシ。将来再誤ラル、ヲ戒ムベキ也。高ノ所西吉ハ慷慨気節有餘。而権略智謀或不足モノカ。彼二姦ハ姦智飽マテ逞シク。大権謀ノ人物ニテ。加之ニ洋学巧黠ノ自在術ヲ得タルモノナレバ。実ニ侮リニクキ老奸。西吉ノ欺カレシモ宜ナル哉。所謂君子与二小人一争ヘハ小人必勝ツト。古今姦邪ノ小人ニ手アヒテハ。慷慨忠直人ハイツニテモ叶ハヌモノ也。併シコノ等ノ奸譎ヲ照勘セザレバ。所詮方今ノ事ハ為セヌ也。当世諸老ニ燭奸之智アルハ幾人ソヤ。

○一、東北辺陬（カタホトリ）ハ常年ニテモ九月中旬ヲ過レハ寒強ク。時ニヨリ季秋ニ雪降ルモ珍カラスト云ヘリ。殊ニ当年ハ閏アレハ気候例ヨリモ早カルベシ。八月半ニモ至ラバ必寒ニ堪ヘザル程ノ事アルヘシ。従来南陽暖地ノ兵ヲ以テ。北辺冱寒ノ地ニ久客タレバ。南人ハ寒ニ堪ヘズ。且傷寒ノ疾発スベク。北虜ハ益得手ニナリテ強ヲ増也。愈六ケシカルベシ。殊ニ吾藩兵ナト寒地ニハ堪ユヘカラサル患眼前ナリ。然ルニ報ヲ聞毎ニ。多クハ捷報ニテ。一度モ大敗ナキハ実ニ皇運ノ隆盛。中興ノ気運ヲ　皇天皇祖ノ冥助（ママ）ススル所ナルニ似タリ。併シ人事ハ人事ニテ不可不尽ナリ。始ニモ粗云如ク交代ノ事出来ザレバ。責テハ交番ニシテ新旧交々用ユヘシ。薩ナトハ大人数ニテ交番戦モ出来ルベケレドモ。吾藩今ノ形ニテハ入交ル新手ナキガ如シ。然ルニ追々迫切ニ至リ。会賊ノ本域ヲ抜ト云一段ニナリテハ。中々大事ナルベシ。片時モ早ク今一二大隊バカリモ加勢ヲ催シテ。後詰アリ度キモノ也。出兵ノ事官ニテ調ハザレバ土兵ヲ募ル策アルヘシ。（土兵ヲ招募スルノ策余嘗テ拙考アリ、即時ニ二大隊ヲ得ヘシト思ヘリ。）戦士ノ情ハ皆々勿論交番ヲ待タザル大勇猛ナルベケレトモ。政府ニテハ其周旋ナクテハ済マヌモノ也。薩人ノ評ニモ。土州ノ兵ハ実ニ勇猛ニテ。只知進而不知無退。コノ向ニテハ始終ノ勝ハ土ニ取ラル、ナラント云ヘリトカ。是或ハ其藩兵ヲ励激セシムル語ニモアルベケレトモ。実ニ亦然ルヘシ。如此ナレハ益以テ可惜ナリ。惜〻戦士ハ良将ノ常也。何卒シテ大勢ヲ拵ヘ入交（カヘ）〳〵戦ハセ度事ナリ。

○一、是非一旦ハ　御出馬不被為在テハナルマシキナリ。是事ハ固リ國家ノ御大事ニテ。先達已来肉食其手ノ有司モ苦心衝慮セラル、事ト聞ケリ。是ヲ阻スル説二ツアリ。一ハ第一金策也。軍士ノ月金サヘモ調ハザルニ。況ヤ　公駕ヲ促カサセラルト云事。所謂可言而不可行也ト。是所謂俗吏不知時務ノ論也。真ニ一大事トナリテ。上ノ御心底ニ徹シタル御事出来ラハ。　御出馬ハ即時ニ出来ルモノ也。其的証ハ今春仏人船ヲ害セシ一件ニヨリ。火急ニ　御登坂ノ御事ニテ可知。是所謂水到渠成ノ実際ニテ。御入費御物入ナト云隙ハナキ急劇事也。実ハ乍恐　皇軍東征ノ御大事。仏國事件ノ可畏程ニナラヌ故ナリ。若ソレ此度ノ征討。真実ニ皇國浮沈ノ一大事機ニ迫リタルト云事ヲ真個ニ識得ル時ハ。何モ角モナキ事ナリ。噫コノ儀ヲ憂苦シ寝食ヲ安ンセサル肉食家アラバ。片時モ早ク此建議アリ度ナリ。余カ輩石亀ノ蹉跎（チタンド）如何ニ思フトモ能ハサル所ナリ。

参考三、「勝安房建白駁議」（明治元年五月）

頃勝安房カ建白ト云モノヲ見タリ、其文躰固ヨリ傲慢不敬ニシテ、毫モ恭順謝罪ノ意ナシ、其主意専ラ幕賊ノ為メニ遊説スルモノ勿論ニシテ、且外夷ヲ借テ恐嚇セントスル詭計最モ可憎也、今略其姦謀ヲ発摘シテ庸人ノ疑惑ヲ解カントス

勝安房建白

其形ヲ取テ其情ヲ尽サヽルハ天下ノ公平ニ非ス、伏見ノ擧、小卒ノ誤ニ発ス、既ニ先五六年、毛利家　闕下ニ不敬アリト雖モ、其情実ヲ尽シ、其條理ヲ正シ、初テ公私如何ヲ決スヘキナリ

此書三道城主机下ニ呈スルトアレハ、呈書也、然ニ文体呈書ノ体裁ニ非ス、頗ル失敬无礼ヲ極ム、外國新聞等ノ体ニ似タリ、是洋学家ノ習気ト云ト雖トモ、抑亦姦黠ノ所為ナルヘシ、何トナレハ此期ニ及テ苟モ恭順卑屈ノ意アリテハ、却テ後レヲ取リ人ニ制セラル、ナト思ヒ、劈頭ヨリ大不遜語ヲ以テ一恐ヲ喫セシムルト見ヘタリ、不然ハ渠相応ニ文字ヲ解セシモノ也、如何シテ如斯不文不敬語ヲ綴ルヘケンヤ、是先ツ勘破セサルヘカラサル一也、其形ヲ取、其情ヲ尽サ、ルハ云々、コレ固ヨリ名言ナリ、古今形迹ニヨツテ其実情ヲ不察ハ、人ノ心服セサルモノニテ、実ニ天下公平ノ論ニ非ル也、然ルニ伏見ノ一擧ヲ此語ニテ辨セントスルハ甚非也、其時ノ情実ハ既ニ其実事実戦ヲ経歴セシ人々各自ニ直見スル所ニシテ、天下倶ニ明白分暁ナル所也、慶喜先とモト号シ、竊カニ会桑二藩大兵ヲ潜メテ闕下ヲ奉犯トセシ事、今更如何ニ辨解ストモ、誰カ其欺ヲ受ンヤ、且当時密旨ヲ受ケシ腹心股肱ノ親臣ヲシテ衝突セシメ、慶喜後ヨリ大軍ヲ進メントスルヲ、豈小卒ノ誤ニ発スト云ヘケンヤ、是小児ヲ欺ク偽謀也、既ニ五六年毛利家云々、是事ヲ引テ慶喜ノ為メニ辨冤セントス、尤モ可笑也、毛利家ノ冤ハ実ニ天下ノ与ニ知ル所ニシテ、今更辨スルニ及ハス、且尾公征伐三謀臣ノ首ヲ斬テ謝罪セシ事アリテ、既ニ　天朝寛典ノ　勅宥アリシ上ハ、臣子タル者妄ニ云ヘキニ非ス、且慶喜ノ事迹トハ似テモ似ヌ事ニテ、諺ニ所謂月鼈ノ異也、此事ハ房州既ニ自カラ長州ヘ往キ、其冤ヲ辨セント請合帰リシト聞ケリ、然ラハ長ノ事ハ房州自心ニ問ヘハ自知スル所アルヘシ、他ヲ欺クトモ自ハ欺クヘカラス、故ニ贅辨セス、其條理ヲ正シ公私如何ヲ決スヘキ也ト、然ラハ今、慶喜ノ條理ヲ正シ公私ヲ辨セハ、果シテ如何ソヤ

事倉卒ニ出テ、大令倉卒ニ出ス、侯伯ノ職其忠諫尽力一死ヲ以國家ニ報スヘキノ時哉

此文意稍明白ナラサルニ似タレトモ、推量スルニ伏見ノ挙ヲ云ナルヘシ、事トハ幕賊ノ暴発ノ事ヲ指スカ、兵粮ナト道筋ヘ蓄ヘ置キ、其餘処々ヘ器械抔蔵セシヲ思ヘハ、コレモ倉卒ニ発セシトハ見ヘサル也、預メ謀リシモノト見ヘタリ、既ニ條城ニテ事ヲ発セントセシガ、其機ヲ見ラレ、不可奈何ヨリ倉皇トシテ逃下リ、浪華城ニテ虚ヲ窺ヒテ俄カニ発セシ也、是形ハ倉卒ニ発スルニ似タレトモ、其情実ハ預謀アリシ事明ラケシ、夫賊謀豫メ発セハ、官軍モ豫メ発スヘシ、倉卒ニ出デバ倉卒ニ応スヘシ、若ソレ賊倉卒ニ発シテ、官軍ソレニ応スル事能ハサレハ、果シテ賊謀ニ陥ルヘキヲ、幸ニ　朝廷人アリテ其倉卒ニ策応セシハ、天運トハ申スモノ、、実ニ勤王諸有志ノ力ナリ、事倉卒ニ発セハ大令何ソ倉卒ニ発セサラン、是軍機ナリ、其機ハ間ニ髪ヲ容レサルモノニテ、生緩キ人々ハ俄カニ発シタル様驚愕シテ、頗ル倉卒粗暴ト思フヘシ、一二機密ニ与カレル大臣ヨリ外実ハ知人ナカリシナルヘシ、其時ノ侯伯、苟モ事務ヲ知ル者ハ皆速ニ策応セシ也、豈何ソ之ヲ諫拒ムヘケンヤ、如何ソ侯伯ノ職、忠諫尽力死ヲ以テ國家ニ報スヘキ時ト云ヤ、是愚人ヲ驚動スル黠謀ニ非サレハ、真ニ可憐ノ愚蒙也、勝生果シテ愚蒙ナルカ、姦ナルカ、亦自知スヘキ也

聞ク三道ノ侯伯、其城邑ヲ大ニセントスト風聞アリ、或ハ首鼠

両端不決ノ評アリト、殊ニ痛心ニ堪ヘサル所ナリ

三道ノ侯伯トハ海道中山東山三道筋ノ大名ヲ指スカ、如此言ヲ以テ侯伯ノ心ヲ探リ、恐嚇セシメントスル実ニ可憎姦謀也、此ニ付一有司嘗言アリ、今時ノ勤王書生ハ多クハ出世ヲ望メリ、皆欲也、苟モ出世ヲ望ムモノハ取ニ足ラス、此一言今時書生ノ針砭也ト、余コレニ答テ云、夫人ト生レタル者、古今欲ナキ能ハス、南朝ノ忠臣勤王家ト雖トモ、楠公父子等数人ヲ除キテハ、出世ヲ望マサル者幾人ソヤ、凡古今忠臣ニ出世ヲ望ヲ以テ人ヲ廃ツレハ、全人ハ稀ナルヘシ、小人姦物ノ人ヲ責ル恕ナキノ甚キ此ニ至ル哉、固ヨリ三道侯伯中ニハ純粋ノ君子モアルヘケレトモ、豈出世ヲ望マサル者アランヤ、誰シモ城邑ヲハ大ニシタキモノナリ、自心ニ省シテモ知ルヘシ、然レトモ義不義ニ依テ、苟モ男児タルモノ不義ニ与シテモ城邑ヲ大ニセントスル者アランヤ、義ニヨリ官軍ニ属シテ、忠ヲ尽シ功ヲ立テ、城邑ヲ大ニスルハ固ヨリ所願ナラスヤ、又首鼠両端不決ノ評アル侯伯モ其中ニハアリシト見ヘタリ、コレハ実ニ痛心ニ堪ヘサル所也、然ト雖トモ事既ニ此ニ至リテ、急ニ方向ヲカヘ帰順シタルハ、逆賊ニ従フテ目ノ覺メヌ侯伯ヨリハ万々勝レリ、武ノ意地名と称シテ非ヲ遂ントスルハ文盲ナル武人習気持ニテ、改過ノ道ヲ知ラサル者ナリ

旧歳　皇國ヲ富強シ、万民ヲ撫育スル令アリ、天朝亦賢ヲ挙ケ一新ノ大令アリ、然ルニ思ハサリキ、條理ト情実トヲ捨テ主家ニ敵セントスルヤ、忠諫ノ事ナキハ尤以怪ムヘシ

此段文義稍分暁ヲ欠ク、富強撫民ノ令ハ旧幕ノ令カ、然ラハ旧幕ノ功ヲ称賛スルカ、是兵庫開港ノ事実ヲ云カ、此一條慶喜前年先帝ヲ刼狭シ奉リ開キシ処ニテ、今ニ於不可改　皇國无窮ノ害ヲ貽セリ、コノ貽害慶喜ノ功カ罪カ、果シテ富強撫民ノ道ナルカ、請其説ヲ聞カン、　天朝亦賢ヲ挙ケ一新ノ大令アリト、此亦分暁ナラヌ事也、所謂挙賢中ニ慶喜ヲモ挙ケ用ヒヨト云意カ、此意ヲ察スルニ慶喜ヨリモ賢ナルハナシ、然ルヲ挙用セスシテ擯斥セシハ、條理ニ反キ情実ヲ捨シト云意か、扨ハ侯伯コノ理ヲ知ラスシテ　天朝ニ属シ、主家タル慶喜ニ敵セントシ、且　天朝ヲ諫メ止メサルハ尤モ怪ムヘシト云カ、是大義ヲ辨ヘサルノ甚キ、辨スルニ足ラサル妄言也、抑今天朝ヨリ叛逆人ヲ征伐セントシテ、沿道ノ侯伯ヲ催促シテ出兵セシムルヲ條理ニ反シ情実ヲ捨ツト云カ、且叛逆人朝敵を伐テ主家ニ敵スト云ハ　王師ニ従フ諸藩ヲハ何ト称スルヤ、名分名義ヲ知ラサル文盲千万ナル事也、又忠諫ノ事ナキハ尤以怪ムヘシト云、是所謂杓子定規ニテ、冠履轉倒也、如此轉倒スレハ往トシテ轉倒セサルハナシ

皇國土崩ヲ愁ヘサル歟、空議今日ニ及ハンカ、小臣至愚ト雖トモ、其解セザル所

是外夷虚ヲ窺フヲ指テ云カ、此事固リ虚喝ニ属ス、何ソ愁トスルニ足ラン、万一実事ナラハ此却テ彼ニ曲アリテ我ニ直アリ、外夷ト雖トモ存外ニ條理ヲ外ニシテ事ヲ挙ケス、必ス此妄挙ヲ為サス、（此事猶下ニ委ク辨ス）今其虚喝ヲ以テ愁トシテ今日実事ノ討罪ノ大挙ヲ空議トスルカ、且空議ト云ハ蓋勝姦ノ心ニハ、関東征伐ハ迚モ虚喝ニテ有マシト思ヘルカ、二月中旬既ニ先鋒ノ王師発軔セリ、爾後逐日ノ事実ヲ見

ヨ、果シテ空議今日ニ及フト云ンカ、真ニ至愚不解事ト云ヘシ

一朝鏸鑁ノ軍ニ到ル也、猛卒百万ヲ卒シテ東下ストモ。決シテ臣輩恐ル、事ニアラス、軍門ニ推参シテ是非曲直ヲ問ハン、今也先ニ一書ヲ以呈進ス、空シク擲捨スルナカレ謹言　　勝安房

辰正月

三道城主机下

一朝云々、誤写アルカ、不文語ヲ成サズ、尤モ解シ難シ、上文空議ノ句ニ對スレハ、此一句ハ皇軍ノ曖昧トシテ何ヤラ分ラヌト云義カ、又鏸鑁ハ雲ノ棚引皃ニテ、所謂雲霞ノ如キ大軍到ト云義トモ聞ユ、若果シテ恐レモ顧ミス、軍門ニ推参セハ、直ニ召捕テ轅門ニ梟スヘシ、猶強辨ヲ振テ不已ハ、一々明辨詰問シテ屈服セシメ、然後誅ストモ不晩也、此等ヲ辨スル何ノ難キ事カアラン、今也先ニ一書ヲ以テ呈進云々、最初ニモ云如ク凡テ書牘ノ体裁ニアラス、敵ニ贈ルノ戦書ノ体ナリ、渠コレ等ヲ解セサルニ非ス、何分ニモ激語ヲステ、誑惑スル姦衝ナリ、正月トアルハ何日比ナルヤ、定メテ十二三日カ乃至十五六日比ナルヘシ、聞ク十一日慶喜已下蒸船ニテ江戸ニ逃下、濱殿ニ於英仏米蘭ノミニストルヲ集メテ会議セシカ、四州皆コレヲ助ケサルヨリ、大ニ落胆喪阻セシト云ヘリ、勝生モ其議ニ与カリシナルヘシ、此書其比術尽キタルステ手ニ贈リシ策略ナルヘシ、存外ニステ手ノ策、人ノ惑ヲ生スルモノナリ、此不可不辨所以ナリ

近ク官軍問罪ノ挙アリト、臣子ノ分共只一死アル而已、何ソ患トスルニ足ラン、其是非曲直ニ至テハ、強テ今分別ヲ論セズ空漠ニ付シ、百歳公議ノ人ヲ待ノミ

官軍問罪ノ挙アリト聞テ、臣子ノ分只一死アルノミトハ、実ニ立派ナル言分也、然ラハ何ソ男ラシク慶喜ヲモ勧メテ、君臣共ニ潔ク割腹シテ弥々其冤ナル事ヲ死後ニ暴白セサルヤ、古今忠臣義士死ヲ以テ其無罪ヲ顕ハセシハ、皇國人ノ常也、古今姦者ノ小人程容易ニ死ナヌ者ハナキ也、英雄ノ惜死ト姦邪ノ惜死ハ、実ニ似而非ナルナリ、勝生真ニ幕府ノ為メニ尽忠ノ志アラハ、詢ニ一死ヲ以テ謝罪セハ　天朝モ或ハ之ヲ哀憐スル所アリテ、幕罪ノ緩ミニモナルヘシ、其是非曲直ニ至テハ云々トハ何ソヤ、既ニ反状アラハレテ官軍問罪ノ挙アルニ当テ、猶コノ言ヲ為スヤ、百歳公議人ヲ待ニ及ハス、今日当下天下ノ目アルモノ、耳アルモノ、皆見聞スル所分明也、況ヤ少シク公明正直ノ人ヲヤ、諺ニ盗ノ強口ト云ヘルハコノ謂也、古今姦賊皆然ラサル事ナシ、世界ヲ皆目ナキ人ト思ヘルカ、真ニ可悪

昨今米利堅ノ報告ニ云、官軍兵庫ノ居館ヲ襲フ、故ニ墩ヲ築キ兵士ヲ分テ、其地ヲ固守シ、猶軍艦ヲ呼ト、英仏亦然リ、長崎地方ノ如キハ未タ其確示ヲ得スト雖トモ、恐クハ同轍ニ過キザルベシ

此一段、例ノ外夷ヲ借テ庸愚ヲ恐嚇セントスル姦謀、最後魯夷ヲ引ク一策ノ張本ヲ為ス也、庸人多ク此等ニ誑惑セラル、ハ、余亦実ニ痛哭悲歎ニ堪ヘサル也、勿論官軍コノ時兵庫ノ巨館ヲ襲ヒシ事ナシ、但聊カ備藩ノ供前ヲ夷人犯セル事アリテ、少々取遣アリシカト、其事ハ償金割腹ニテ済タリ、又吾藩人ニモ夷无礼ノ事アリテ、詰問シ夷人大ニ屈シテ謝罪セシ事アリキ、其比ニヤ神戸ヘ関門墩臺

ナト設ケ、妨備セシト云、或云是夷人旧幕ヘ云訳ノ為メ、聊カ其形勢ヲ示セリト、決シテ仰山ニ云立ツヘキ程ノ事ニ非ス、ソレヲ如此皇張スルハ全ク夷人ノ為メニ遊説スルニ非レハ、幕賊ノ為メニ官軍ヲ虚喝スル也、若不然ハ夷ト内通シテ内外ニ事ヲ生セントスル策アルヘシ、長崎地方云々、殊ニ可笑、果シテ同轍ニ出シヤ、吾藩士鎮臺ヲ逐出シ、碕陽近辺ヲ鎮撫セシ大功ヲ知ラサルヤ、若外夷ニ通シテ内犯セントスル姦謀アラハ、其謀ヲ看破シ、夷胆ヲ震恐セシメタルハ豈愉快ナラスヤ、勝生ハ之ヲ聞テ痛哭悲歎ス、余ハ之ヲ聞テ巨躍三百ヲ為、人ノ意見ノ殊ナル、何ソ其如此径庭タルヤ

遠クハ印度ノ破、近クハ支那ノ地長毛官兵是非曲直ヲ鳴ラシテ間々相喰、西洋諸國其虚ニ乗シテ今也　皇國殆ト同轍ニ陥ラントス

是英仏等ノ黠虜、毎ニ口ニ藉キ人ヲ嚇スル常談、洋学家亦自己落胆セル死魂ヨリ、毎々口実ト為テ、庸愚婦女ヲ驚動セシムル事ニテ、更ニ怪ムニ足ラサル也、夫印度人ノ軟柔、支那ノ文弱、長毛ノ暴横、豈　皇國ト同一ノ談ナランヤ、印度ノ事ハ今詳ニ知ラス、支那長毛ノ事ハ略聞シ事アリ、支那君臣果シテ大有為ノ人物アリヤ、只僅カニ僧恪愀親殷兆庸等ノ数人アルノミ、今日　皇運隆盛朝日ノ登ルカ如クナル勢テ、四五大藩ノ侯伯、天下数万勤王有志、既ニ十ニ七八分、事ヲ済ルヲヤ、豈同轍ニ陥ルト云ヘケンヤ、猶末ニ云ヲ観ルヘシ

口ニ勤王ヲ唱フト雖トモ、其形勢ハ今日ニ及ヘリ、公平ヲ唱ヘテ大私ヲ挾ミ　皇國土崩、万民塗炭ニ陥ルヲ不察、是ヲ何トカ云ハン

此一段、最モ以テ不可不辨ノ誑語也、是特ニ勝奸ノミナラス、方今勤幕家ノ論、皆然ラサルナシ、口ニ勤王ヲ唱フト雖トモ云々、勿論唱ルハ口ニアラサレハ能ハサレトモ、大率唱ルモノ皆直チニ身ヲ挺シテ擔当セサルハナシ、勤王ノ侯伯、諸國有志ノ首唱シテ幾ント千万人ノ身命ヲ抛チタレハコソ、今日如斯皇威ノ皇張　皇運ノハコヒニハ到リタルナレ、是勤王ヲ唱ヘシ大効験ニアラスヤ、其形勢ハ今日ニ及ヘリトハ、殆ント今日ノ実語ヲ為セリ、又公平ヲ唱ヘテ大私ヲ挾ムト、何ソハ、暗ニ薩長ノ所為ヲ指ス歟、夫古ヨリ英雄豪傑ノ志ス所、伯者ノ業ナリ、斉桓晋文尊攘ノ大義を唱ヘテ天下ヲ風靡セシモ、其実私ナキ能ハス、亦権謀ノ雑ナキ能ハス、聖賢君子ニ非ラサリシヨリハ、純粋精微ナル事ハ能ハサル也、況ヤ薩長ヲヤ、固リ挾ム所ナクンハアラス、雖然其名義ヲ立ル所正大ナレハ、自カラ私ヲ営ムノ誠ヲ免カル、也、今時其功ヲ妬ムモノ、動モスレハ薩姦長偽ト云、コレヲ旧幕ノ所為ニ比スレハ果シテ如何ソヤ、況今現ニ天朝ニ反キ逆賊ノ名ヲ負ヒナカラ、猶何ノ顔アリテ人ヲ譏ルヤ、若果シテ旧幕ノ所為ナラハ　皇國土崩、万民塗炭ニ陥ルヲ免カル、歟、ヨシヤ薩長公平ヲ唱ヘテ私ヲ挾ムニモセヨ、大逆ヲ起シ、大私ヲ唱ヘテ姦謀ヲ挾ムニイツレソ、不思ノ甚シト云ヘシ

臣上進シテ微忠ヲ愁訴セントスレトモ、今ハ有罪ノ小臣、我主ト一死ヲ待ツノミ、然レトモ黙止スルヲ得ズ、希クハ此微忠ヲ以参与　闕下江代訴セラレン事ヲ、誠恐謹言

所謂微忠、　天朝ヘノ微忠カ、将タ反賊ヘノ微忠カ、抑々天下ヲ疑

惑セシメントスル姦謀カ、苟モ心志アル者、誰カ肯テ助逆テ闕下ニ代訴センヤ

小臣是ヲ海外ノ一知己ニ聞ク、魯西亜首トシテ同盟諸國ヘ報告アリト、其趣意ニハ東洋日本ノ定約、徳川氏幕府職タリシ時結ヒ候所、今日ニ至リテハ其國ノ大身会合一定ノ事アリシヲ不聞、一二侯伯倉卒ニ出ルモノハ尤以可疑

是コノ書ノ主意頭脳也、コレニテ十ニ八九、庸愚ヲ壓倒シ尽ス積ナリ、初ニモ既ニ出シ、姦謀固ヨリ珍シカラヌ手段、庸愚ノ驚愕スルトコロ、英雄ノ冷笑スル所也、先海外ニ知己アルハ怪シムヘシ、余嘗評ス、此輩不逞ノ徒、所謂北不走胡必南奔越ノ姦賊ニテ、若シ志ヲ得サレハ賊虜ノ耳目ヲナスカ、又ハ海島ニ拠テ賊ヲナス鄭芝龍一輩ノ人物也、尤モ不可油断、就中魯夷ヲ借ル狡黠ト云ヘシ、英仏ニテハ人欺カレ難キ故也、夫旧幕ノ結ヒシ定約ハ、假ニテ私也、今日天朝ノ結ヒシ定約コソ真ニテ、公ナリ、既ニ日誌ニ印行シ、参　朝ヲモ遂ケタリ、何ソ大身会合ナク、一二侯伯倉卒ニ出ルト為ルヤ、聞ク魯尤モ鄭重也ト、何ソ如此粗妄アラン、其事実條理、已ニ明白正大ナリ、何ソ可疑事アラン、是例ノ外夷ノ強ヲ挾テ恐嚇ヲ為、姦計著顕也

其條理ヲ究問シ、其情実ヲ尽シ、其可討ハ討チ、其可助ハ助ルモノハ、大國小國ヲ保護シ、其國ノ生霊塗炭ヲ救フ、各國條約大信義ノ至ル所也、同志同盟ノ諸國ハ、共ニ軍艦ヲ總テ東洋ニ向テ其是非ヲ問ハント、其実否ニ至テハ未タ如何ヲ知ラスト雖モ、必ス其事発センヤ必セリ

洋学家動モスレハ條理々々ト云、

抑我　皇國ニテ　天子ニ叛キシ逆賊ヲ征伐スルニ、海外ノ夷虜何ノ構フ事カ有テ何ノ條理を究問シ、何ノ情実ヲ是非ヲ尽サントスルヤ、内ワカ　天子ニ叛キテ、外夷虜ニ訴ントス、コレヲ條理アリトセンヤ、已ニ君臣ノ大義ニ背ク、猶何ノ條理アルヤ、所謂物理ノ理ニテ倫理天理ノ理ニアラスト知ルヘシ、可討ハ討、可助ハ助トハ、何事ソヤ、兼テ旧幕ヨリ頼ミシ事アラハ知ラズ、サモナクハ上ニモ云如ク、何ノイロセ構フ事アラン、況ヤ如斯真定約ヲ結ヒシ國ナルヲヤ、又大國小國ノ保護シ、其生霊塗炭ヲ救フハ彼等カ属國ノ事ナリ、我　皇國中ニテ反賊ヲ征伐スルニ、海外人ノ何ノ交渉カアラン、同志同盟諸國軍艦ヲ總テ東洋ニ向テ其是非ヲ問ハント、其実否ニ至テハ未タ如何ヲ知ラスト雖トモ、必ス其事発センヤ必セリト、此事果シテ勝生カ姦謀ニアラス、真ニ魯夷我カ虚ニ乗シテ侵寇スル挙アラハ、此コソ願モナキ幸ニテ、真攘夷ノ行ハルヘキ時節到来ト云ヘシ、彼ヨリ如此暴挙アラハ、曲直ノ分大ニ明カニシテ、慥カニ辞アレハ國力ヲ尽シ、焦土トナリテモヤルヘキナリ、ヨシヤ内外敵ヲ受タリトモ、直名ト辞アラハ、必ス始終ノ勝ヲ保スヘキ也、況ヤ今日ノ如キ、我武ノ大ニ揚レル時ニ当ルヲヤ、真ニ千載ノ一機会ト云ヘシ、実否ハ未タ如何ヲ知ラス云々、是覚ヘス偽謀ノアラハレシ処ナリ、庸愚人ハ必シコレ等ニ恐ヲ喫スヘケレトモ、少シク心眼アルモノ誰カコレニ恐嚇セラレン、余ハ但コノ事ノ虚喝ニテ実ナラサルヲ恐ル、ナリ

従古東洋諸國、西洋各國ノ為ニ蹂躙、内附スルモノ比々トシテ

皆同シ、属者邦内ノ小是非相喰、終ニ其國家ヲ失ヲ不察、私ヲ逞シテ其極其國破ル丶ニ不出也

奉王命討反賊ハ大義大名分ノ所在也、豈邦内ノ小是非相喰ト云ハンヤ、洋学家ノ大義名分ヲ辨セサル甚ヒ哉、是皆利害上ヨリ発スル説ニテ、義理ノ学ヲ講セサル誤ナルヘシ、ヨシヤ此挙ニヨリテ國家ヲ損スルトモ、已ムヘキニ非ス、況ヤコノ大義名分ヲ正シテコソ、内ヲ正シ外ヲモ正スヘケレ、此挙実ニ伯業ヲ宇内ニ成スノ基本トナルヘシ、豈私ヲ逞シテ其極其國破ル丶ニ不出ト云ンヤ

今ハ英吉利斯ハ兵庫ニアリ、仏良察米利堅ハ横濱ニ在テ、英ノ下風ヲ不好、魯國豈二國ノ下ニ附ンヤ、大信ヲ唱テ以我　皇國ヲ内附セントス、誠ニ其深意ノアル所、是ヲ掌上ニ視ルカ如シ

此段、徒幕賊ノ為メニ游説スルノミニアラス、外夷ノ為ニ説客ヲナスモノ也、且例ノ文意分暁ヲ欠、主意明ラカナラス、只魯今日ノ虚ニ乗シテ我ヲ内附セントスルト云意カ、若然ラハ人ノ國ノ虚ニ乗スルヲ大信ト唱フ事、未聞トコロ也、万國公法等ニモコレ等ヲ論セリ、是必無ノ事也、余亦コレヲ掌上ニ視ルカ如シ

然ルヲ思ハス、侯伯黙止シテ唯領内ヲ固守セントスル、是ヲ其任ト云ンヤ、且勤王ノ真意又イツレニ在ルヤ、百歳ニシテ公議定ル、如斯ナルモノハ是ヲ報國ト云ハンヤ、印度支那ノ轍、不遠　朝廷ヲ託属シ、皇國ヲ内破ス、其責何人ニ在ルヤ、況今也百歳ヲ待タスシテ小臣其詳解ヲ問ントス、希クハ私ヲ去リ、公平大義ヲ以テ小臣カ　疑惑ヲ解カン事ヲ、恐惶謹言　勝安房

方今時勢ヲ与所ニ見テ、徒ラニ領内ヲ固守シ、　皇軍ノ助援ヲ成サントモ、思ハサルハ固ヨリ自私自利ノ徒ニテ、其任ニ非ル也、亦勤王ノ諸侯ニ非ル也ト、コノ難偶々中レリ、信ニ勤王ノ真意イツレニ在ルヤ、百歳ニシテ公議定ル ト云ハ古ヨリ名言也、併シコレハ正論讜議、又ハ正人君子ノ讒誣ニ逢テ、其冤罪ノ霽レサルモノ、実ニ百歳ニテ公議定論ナリ、今日幕賊逆罪ノ如キハ、天下億兆ノ知ル所、天人倶ニ怒ル所ニテ、今日論定テ更ニ疑惑スル所ナシ、其中或ハ偶疑惑アルモノハ、利害ノ私ニ溺レ義理ノ当然ヲ知ラス、感慨義烈ノ気ナキ人々ナリ、苟モ皮裏ニ血アルモノ　皇朝ノ一大事、朝敵ヲ征伐スルニ方テ、何ソ疑惑胡乱ナル事アランヤ、実ニ是勤王ノ真意ノアル所、報國尽忠トハコレヲ云ナリ、徒ニ黠虜ニ恐嚇セラレテ、器械ノミヲ頼トスル洋学者流ナト夢見セサル処、宜ナル哉、印度支那ノ覆轍ニ恐怖スル如此ナル、盲眼ヨリハ是非黒白轉倒シテ、癸丑庚寅已来十数年、志士仁人ノ幾千万モ粉骨砕身シテ、漸々ニ千古ノ真機会到来セル今日ヲ、朝廷ヲ託属シ、　皇國ヲ内破スト思ヘル様ニ迷謬セシハ、其責果シテ何人ニ在ルヤ、是果シテ迷謬カ、抑姦譎カ、余亦今日ニ当テ其詳解ヲ問ハントス、希クハ私意ヲ去テ君臣大義ノ公平ヲ以テ、コレカ答ヲ聞カン事ヲ

想辰皐月端午前一夕、草於改過自新、書屋南簷梅霖浹旬、湿雲掩窓竹、獨酌遣悶、時天色忽欲霽、可歓可賀

時しあれハ葵の花も咲はて丶　なかしの雲の晴むとすらん

外物醉夫漫識